

和帝編叙

津城之地有巧匠字曰吉竺壽世
以高田爲姓氏四代已來繼父
之緒修治薦席作大飽計當時
得意富而不奢苟吉人之名不
呼者少可謂名宗相合孝聲共
鳴所以上役賢哲之門下抵民
萌屋宅不怠其事蠢假收終不

雅俗文庫/和帝編叙

九州大学
附属図書館 和 備
010112016718562



問風雨朝而往暮而歸生涯猶
烏鳬飛走雖然間亦攬賦照書
於螢雪下志于季多歲內有所
得外粟所求然而人心歷緣對
境豈不無毗哉籌之言曰或日
入鄉他聞女子之詠百人一首
其歌也古乃奈良都乃八重
櫻今日九重仁勻奴留哉詠終謂

曰八重者則地九重者兼天天
地同根一枝花便得遭時當座
諺神變云春歌第一孰愈伊勢
之詠實以秀逸我在此中腰句
其鮮因一疊上地八自成八重
天九自就九重則是天地合乎
斯櫻於是以爲我家業則八重
薦席也宜令華乎今者八重一

合合成呼名疊往昔海神鋪八
重席薦於三牀上即試禋孫之
來風欲使萬物一體自具玉與
渠雕琢耀于後世好收節初設
重疊之儀式蓋其意思三牀是
奇八席是偶爲陰廣陽其氣互
能上升下降相交而後萬物化
育是用敦請火火出見尊於豐

玉姬之海宮慇懃奉重其席之
正猶如此凡星數一百四十九
萬七千九百餘霜雖季代遠我
家舊業本立於此先是不記其
事之始今因來歷分明取之近
者撰和席編分爲三卷合列三
戈略陣疊席之因由與象職之
權輿復次和解古今席中之道

理嘗恨獨學孤陋顛言倒語雖
無可取譬腹剜心知人知焉惟
願賜評品并序辭則覽者與我
同到快活地縱使有疾忌之徒
橫議難沮不妨加被威神之力
又無所患也於戲箇吉人無易
由言文莫吾猶人也而況以俗
事乎須令同志後彩爲此也壽

顧念重獲而有言古之內典習
俗多序今之世書僧象弁之雖
異其位彼此同使誰人怪之乎
緣於此不得已見聞之所接知
覺之所感應和一席而因貴言
運筆昂誌因爲賦詩以遺之維
敗明和乙酉菊月吉辰輪寶峰
下當午菴春嶽老杜陀識

襟懷巨得自然適
可惜光陰如旅客
作業無邪後世因
今生孰克出塵夕



和席編自序

夫和漢古今稱為四民者
士農工商也今門列肆或
學以居位壘土施穀作巧
成器通賤阜貨務本逐末
勤而不怠各精其業者未

知幾萬員所受業於父祖
職覺席之事所惜光陰生
涯半忙或以為一家活計
皆有所受此所業以何時
何世為始乎當有其古問
之識者曰未嘗聞也嗚呼

解恨未見諸職圖籍古賢
何闕之哉固蚤夜留心考
諸群典竊天文探地理大
畧拾收墨席根元口決絕
事三知周舍而卷懷成命
名曰初席編後來上中下

算各名機樣和世一席積
 功日新象但望焉
 明和甲申秋九月日
 勢伴府疊席師

高田吉算撰



和席編上卷目錄

七	六	五	四	三	式	壹	八
疊綴地類	表席品類	巧匠字義	表字辭	疊字考	職分遠祖	疊席權樂	居取凡名
十四	十三	十二	十一	十	九		疊席寸尺
真行草位	新牀作樣	九樣科簡	傳漢尺法	隅寸定尺			

上卷目錄終

和席編中卷目錄

- | | | | |
|----|-------|---|------|
| 九 | 拜席之事 | 九 | 緣幅定法 |
| 十 | 鋪設品類 | 武 | 疊為嫌病 |
| 十一 | 薦之品數 | 三 | 板疊刺樣 |
| 十二 | 筵席諸名 | 四 | 船席兩解 |
| 十三 | 日西復席說 | 五 | 紙緣疊說 |
| 十四 | 鉦鼓席傳 | 六 | 奧緣疊說 |
| 十五 | 單緣圖說 | 七 | 兩面疊說 |
| 十六 | 疊師諸具 | 八 | 茵褥別解 |

- | | | | |
|----|------|----|------|
| 十九 | 大月疊辨 | 十七 | 疊鏡圖解 |
| 二十 | 疊席之銘 | 十八 | 蒙枯字類 |
- 中卷目錄終

和席編下卷目錄

- | | | | |
|---|------|---|------|
| 五 | 爐疊敷傳 | 五 | 疊天地位 |
| 六 | 壹間床法 | 六 | 疊上下位 |
| 七 | 貳間床式 | 三 | 疊鋪樣傳 |
| 八 | 異床兩解 | 四 | 同鋪樣傳 |

九	小床疊辨	十三	弥勒席圖
十	片疊必事	十四	吉凶鋪様
十一	蟻目疊映	十五	産室之圖
十二	茶座鋪圖	十六	疊印附様

和席編目録終

疊席權輿

夫疊席の濫觴と考るに季代も遠くて今其工人
 多難願をふ多し所以老神代卷に曰天照太神三世
 孫饒速日命御子彦火火出見乎海神の宮不至り
 孫小海神於是八重席薦と鋪設延内云即是我
 朝疊席の始なり増韻小菟蒲と席といふ豪格と
 薦といふ又重ると筵といひ單と席といふ爾雅に薦ハ
 禾藁蓬野苳を實とむるなり又唯薦席
 不堪とてと蓋簾録に曰中國古者地は席て坐此
 床椅なり後世の設り上下に通じ本國今日も制
 朝廷の正衙唐制不做と除此外居處床椅を設

市尺室中板を將く架を倣しよは厚席と稱名て
之と云稻稈を掘取縦横織成して厚き寸餘長き
一步濶さこれと米よと被ふるに龍髯額席と以て
兩傍小縁と成或布或絹室の廣校と計よ疊と云
あわを以て此縁と云此漢云小疊所也と又云カ
圖會曰疊ハ重き也厚き也疊疊の義也高と用お
ふ第く指し踏込め厚き一寸余粗く縫圖の号成
之乃床と云薦を以て裏と爲し藁席と以て表
と爲し其縁高麗縁雲綯縁絹縁縁等あり民間の
縁々皆紵布を用ゝ額思は海神の女と云玉姫因は
天孫を請ひて八重席薦と稱亦純乃と云其よ小

敷ア上床下草と云語は曰席云々されど唐を倣し
實成分れを以てよ古より流傳し來て勝教富屋
此席を草の唐城と云是を倣し以て今世の祝
辭と爲す中古の巧匠尙捷經は便して合連綴
ハ草と草薦と稱す遂小疊と薦と異るのこゝに時
を舉つて異なりて一字小疊と薦と異なり

織分遠祖

古語拾遺云曰玉玉姫鸕鷀草蓑不合而す成
と云す此蓑衣は遠祖海濱より來て建村小掃守連
のち天孫人命供奉詔傳して浦段を草と遂小
疊と織と云といふはは合ハ織分後助の祖なり

信仰改人者其功言者我——職原糾冬老に
曰掃部寮唐名酒掃署鋪設乃車也掌る者
從等也天子人等節令亦所及人乃座
と接ふといふなり今も亦常礼敬中盛なり
神々天恩人令なり

田豐字考

字日巢小田豐は徒協切音牒重や厚也隋也明
なり累之積也屈也又震懼也又翫之內——南史に高
昌國子車ある實は綱中の絲の也——細繡とて名つ
ちて白とて不安ふ乃人取て白く布に爲る是
輦白といひ説文小揚雄以爲古、理官墨と決む

車三日いして其宜きを得たり乃これを折ふは小
字宜きふといふ新室以爲三日八次盛なり改く
三田と爲る又經曰上妙の細翫と帖乃韻達協の切
微き翫小曰切韻小細も布なり今謂ふは
別は翫萃なり織て以て布と爲る今これ白翫
布形と名を以て作るものハ裾なり又科経小曰
細翫者萃繡なり布先ハ重席薦を以て重席
の布を釋き復次く此書典公等と檢するは蓋
翫と翫と同韻よて白と以て通用を然ハ則
てハ一字の稱よ——體異用同——故小字書
小とて以て器敗り列を苟に其門を爲るは

今面儀を以て傳覽し屬す并六異の書
換む出疊古事記延喜式
下學集席薦日本紀神代卷
舊事紀席神代卷

置置席 三方圖會

帖

禁秘抄延喜式
倭名集江家次第

太々美

倭名集ノ
假名

附表字辨

古事紀小曰美智の皮乃多八重城敷亦絶の多
八重を其上敷其上に坐せしむと云く是二席なり
所るた八重を敷るハ八重の訓を幾重なりと
ふさる敷——美智おきた唯是表と解所以を
寄天論は曰天の形ハ笠乃如しとて此の表は胃ハ
蓋表の名は小本くは日本紀小曰海驢は云美智
巧匠一字義

譯文登蹄小曰巧はたふと云と訓て細工の上は
巧匠といふ様よりして何れも切あるを間積
のより能きゆふといふべきなり巧といふ拙の反
對にして其訓法を我拙といふ其表を多なる
りの上ゆを巧と云ふは是を内小ゆふといふ能
る合ふなりとあり思ふに能くは能くハひる家
といふ漢巧といふもたふと訓すは鐵人を想
ふる也工匠と云又詩の詩小詩は工あり精工也工緻
形もたふと云ハ巧字ありて是列あり詩はたふと云
やふといふといふなり巧工工緻ハ上ゆなりとてふれ
つゝたるも也巧字の云かあるとてせしむるは是なり

形を道もたつと訓く續倭漢名數に曰六職八王
 公士大夫百工商旅農辰夫婦巧あり二以自給而
 是徳の工道あり故不九流の内雜家せり又良工
 二八名人を指ていふ也又倭名集に曰穀梁傳に曰
 昔工人の望工和名太夫美匠上麦巧人々々故事要言小
 曰國小三宝あり太農太工太商也細工其郷中
 小なるもの多し器品多く充満すと記せり

喪席品類

倭名集一名梵心草又虎嶺草又曰莞音九漢語抄又曰於保井三才席用集小弁色立成以て席を爲す者なり竹筴音各

臥て一箇の席を占む

三才節用集曰一名
菴常草又稔心草云

喪

說文曰
碑矦矦反

字閑裏

六百里

字良

和漢

三才圖會

曹小曰堯

席

備後の國を出入る上とて、河州を以て不次く、援
群乃上席に是を荒長一傳中傳前にて不次く

備後席

同小長復

備中席

備前席

近江席

淳
菴
席

わくは花巻——故はあぢも巻——
同ねきし巻——てすまへく偽後表はおれり偽後席と
ひる通車なりこれもおこけ表あり
おろし巻——といてもすまへく思ふと思ふ長髪といふ
奥の山宮より織女のみを被群の上席に中道に席は大ん
二十は良品といひらばさびきあり
に別より織女をもやゝ石ちものや——堅の糸を寄ぬきて
おもむけたるかた異く世よりきよぶいひえいご司通入

小間席
遠江席
花席
英濃席
老濃席
小田井席
肥前席
肥後席
伴鯨席
佐渡席
琉球席

近江の玉より織物もたてよこすまゐり故は名に
吉田より織物もはあき思へん長く性まつよ
たてよこす小のふあり
近江新川より織物も是れよくに染めて名産と
波草の玉より織物も是れ表は赤似り性活なり
振津の玉より織物も堅横小く細に似り名産なり
おやうり
尾張の國小田井村より織物も性弱くまじなり
節用秘密簾は肥前の名産なりとぞ未見
熊本より織物も一の性活とぞ
大畧近江席はお似り一也
大畧小田井は玉の似り又うきを席の近江表は名産
菩薩摩訶の國にも出る席は性活く堅横小く大畧一也
七海表は又近江の玉よりおやうり名産とぞ

強席
丹波席
越前席
小松席
庄内席
伴勢席
稻生席
松坂席

備後の玉より織物も一也一のあきなり
おやうり長く上席は又似て丹波と云席はよいや
大畧近江表は似ておやうり席なりとぞ
かかゝの玉より出ぬ
おやうりの玉よりおへ
負ふ名より出せ早席なり
いせの風庵藤原よりおやうり早席あり
同玉まつさうより出せ早席なり
近江新川より織物も是れよくに染めて名産と

田舎縁地歌

昔事紀は曰天照大神の時始て其表裏の乃り

織織の業を起し終ふといふ應神天皇の時時
女工の術精くぬきむらひ終ひ十四年に百歩以
より縫衣の工女を色澤といふ者を乞ふ二十七
年の春使を異國に遣して縫衣女を求め終ふ
は時兄媛が媛吳織衣織乃に人城はつた是
より始て織衣裁縫の術精成りしより日本記
よりとるべきなり續日本記に曰元明天皇初洞又
年仲勢尾張之河後河仲豆辺に越前丹波
但馬周備伯耆出雲播磨備前備後備中
安藝紀伊阿波伴祿備後等二十一國を以て
始て綾錦を織らむといふ所は終より世小

弘ある平海人深屏月小曰帝王院綾綢縁を利
神佛前中を綾綢縁を利也此外又小羽羽織り
縁ざるものなり大段の多羅麻縁親王大段のれ織
羽の以下小羽の織り大段以下公卿以下乃
高麗縁より僧中ハ僧以下有職非職ハ
は縁縁ありに位又位下云々と云ふ縁を利也
六位侍ハ貴地縁より侍寺縁社ニ綢等ハ皆貴縁
を利のこゝろ元明記に暈綢の色を染作て歎之
本朝式小暈綢綿に見ゆ暈綢通一綾綢通を
類篇小緯ハ間色を染む綢ハ綿文なりといへき
後世式ハ綾綢は作るされど縁の字あるを

物よりけんを見ゆ

白端白家次綿端倭名集は其價金の如暈暈綿家次

高麗綿上同軟綿上同雨面綿上同蜀綿国花唐錦上同

越后綿上同綉段綿上同廻文綿上同女女實實錦上同

紫文文白地綿白家次青文文莫地綿上同東京錦上同

綾和名集熟線綾上同長連綾上同二足綾上同花文綾上同

平綾上同繡同五色の糸を以て此系縁上同絳絹端上同青縁

上縁上同白地黒文端上同黄絹端上同黄布端上同絶端

梅花和語等也布は江島宮縁等後府内布次

越前布あを縁地はよりけ外宮早家の浦段等

お好は懸して縁を織りぬれも有は其ふりたに記

蜀江錦 呉郡綾 紗綾 印金 託子 縮緬 取理

光綾 莫卧児 綿子 綸子 綿珍 流紋 白二重

金襴 女綾 皆生 蛭夷織 紗端 顯紋 紗 紬

婦、はかびあんな小絹 那内絹 二重紗 惣席子

小多しら端 綾 絹 蛭夷綾 小文端 雪の下

膏狼毫 柳條 堀らに織 撰糸 聖多災

日野絹 紗二重紗 質斗目紋 絹 免褐 大官絹

摘葛刺 天誓絨 花綿綿 顯文絹 青虫屋

綾 機織 衫 絹 素二重 花虫屋 紗 結 黄絲絹

汎織 二重穀 結子 浮線綾 花 蛭子 花 綾 本綿

作法 紗 兒 二重綿 襦 襦 綾 染 生絹 唐間の 緋

文布 調布 和妙布 火浣布 貨布 葛布
芭蕉布 藤布 袂刀布 宇治布 上京布 商布
白練布 望陀布 白麻布 黄草布 魯縞布
信濃布 倭賀布 丹波布 但馬布 八講 生平
半晒等也 舊事本紀曰 天照太神の時倭文
遠祖天羽檉雄神にて文布を織し是布を織の始也
居取凡名

神代卷は倭書諸尊倭書冊尊 倭書與盧寫は
降居くハヨ等の殿を化作又天乃柱を化豎こ有是
宮室營作の始なり又兼良公の 筑紫疏り 大
戸道大古邊者より代耦生神也大ハ言稱也

戸ハ家なり二十ふれを戸といふ道多 諸事如
言ハ泥乾き沙平うに―て家あり道あるあり
邊ハ語助字なりを言ハ書を編るなり草を
屋を覆ふ事なり言ハ屋宅をて言ハ以て
蓋い覆ふ風雨を防ぐの事上吉の氏名巢巢に
倭ハ官は居といふ官室といふ所の神号なり
ハガハ後世の事をいふ或説は曰は時始なり
官室といふ武用兵器を曰は堀堀輕く―て掘
ゆくり堀有る堀に接間切なり城といふ堀堀
槽なりを補綴といふ也殿といふ將軍家と
指ていふ也―屋形を呼常れ武家といふ也

殿小殿申に指さる將軍殿に居る也之有る也
に指さるる忍ゆひもや天子を階下と稱し東宮
執政と殿下といひ太皇太后下と云ふ處て武家
主君と指さるる例ありと也

帝室舊事紀事曰神武天皇有司小樓臺神代卷曰房火出見海神乃

行宮日本紀曰神武天皇乙卯歲三月徙吉備炊宮和名伊保利日本記

鴻臚鼓下學子集曰異國の使者を呼ぶ居る所廣間式書曰玄關書院

式臺武用兵器を曰客來の時主人送定して礼玄關同書曰玄關書院

上段書院坐鋪の上より取らるる座書院同書曰今廣客射入時力殿書院

客座鋪使者間居間時計間納戸儒醫間

信而老中部至用人部至迎智部至右筆部至
學文取臺子間系道部至教習至圍運水至
兒小性部至目附部至離座至瑛間新宅物置
勘受取徒士長部至枕背古場賂部至中間部屋
廊下侍部至公孫部至接女健兒所浴室書院
後架小便所問註處臺所厩馬見所料理部至
小奥室武用兵器を曰主人の安息する所也西南の隅に奥室と源居たる處あり寢間又臥房老女部至
花粧部至裁縫部至中居部至茶間御末女の食を
二階座鋪長局次間後前休所佛間向坐鋪
書院小書作事小書子息部至飛脚部至書院
式書子曰東山殿の御殿に孫く此座敷入名河判

こけ用のこけはし亦地を全補建あり
小座お小座の寛寸尺あり下座は坐臥大目
寛長の寸法ありいしすく下座小座は
揚寛長幅丈座おの寛に應ぢやいしと
厚サハ計寸五分表縁はくく多サ計寸五十分
是れ天地の合位なり計寛一丈一尺五分
礼盤寛ハ方計尺式を計尺五寸厚サ計寸五分
高坐の寛ハ一丈一尺一内矩の寸法とそに方
の寛の多サ縁サを計するて揃る可なり
桧木程の御畳席
八重薦席 古事紀 九尺御畳 如家 五尺御畳 同上

六尺御畳 同上 七尺御畳 如家 五尺八尺御畳 延喜式

隅寸定尺

隅行乃寸尺を試みて一間の長短ありて分明
小知れく一故は隅の考図を長尺に依りて
刻記して其より寛を計り即ち八曲尺を
用いて其を計るべきなり計るは七尺
の寛に八曲尺を用いて是を計るは七尺
亦七尺の寛を曲尺を用いて是を計るは七尺
蓋は寛を計るべきなり計るは七尺
又八寸の寛ハ八寸を用いて隅の寛も亦八寸也
曲尺小法則は八寸九寸の式をさる人

尺の一寸に分弱は比もいふやむい外へ品数廿七
睡度量衡考かあ

九様料竹間

席間望様曲直随方

大薦編様索結酌量

床稿陪様初調後配

床薦鍼様手眼成行

新牀占様縁和脚力

表席張様傳兼智詳

縁置刺様直試廣校

伏針使様縁色勻粧

撫板封様減座不俛

上件皆是為我家常

新床作様

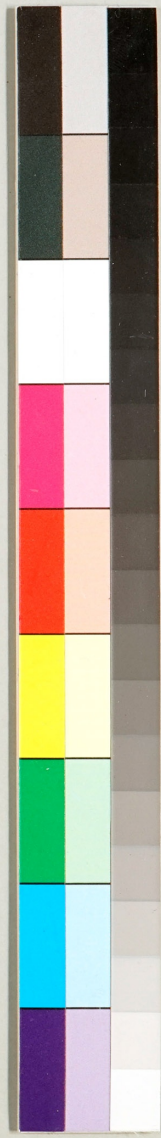
萬物ハ陰陽の理小調をさねとふ事なり ありと
亦もねありと下れとありと自家傳は曰ある床
ありと小他らんと欲さハ其好む所の間人ニ横を
さす床小大薦を切定め裏薦ハさす寸さ力廣り
切てはくは堅様を陪様して其の底を作らん 陰陽の
作法ありと前ハ薦薦乃小角ありと掛薦と草末乃
櫛又分見して糸面を廿五に造將は陽敷乃分
位と下ありハ枕薦をさす見て造將はゆきと

板を撰い席を八曲をる低すより高く看
望て繩を以て門張四方の非を改定へ
堅薦板薦可床の体よりありのちより
偏移の七級増減を握りて同をへ
里合の陪張を造り造りて其の用を重とるへ
中後ハさすその柄を造りて造りて
新床ハ上下の薦の府造り糸造り柱をたふハ
見苦し 刺す力中は眼を造りて
古床又對して新床をさすより其の造り
さす弱くハ占糸を配合して甲しかりて
表席ハ織初をさすへとさすより
の造りてハ用造り小さく表の織を造りて
平刺糸造りて糸面を直に換付をさハさ
平刺糸造りて糸面を直に換付をさハさ
白縁ハ不造り糸造りハ針鋒をさ糸面を造りて
捻結の用造りハ曲尺と造りて 結櫛を造り

板の納様其封固仰るを俛さ下し刺向へ
見苦し

陰敷の分位より掛縫の縁通り八連に於て乾
乃象を表し堅剛より貴しき一より是れ陽
物也故小繩止の糸の敷式は何十二式何十三或ハ
何十或ハ七九と陽敷を用て繩止より粒ぬい
の糸通り八断よりして坪方形よりして弗弱よりして
賤しき一より下より是れ陰物也故小繩止の糸の敷式ハ
何十二或ハ何十三或ハ六八と陰敷を用て繩止の
事故實を利接し糸面乾為天の如く連り
坪為地乃より隔りて堅弗ル亦然り扱又床乃
より月力收を計敷のぬりハ國々處處此風を或
其家々の流義師僧等區々ありきり稀也

こと此費月乃收を小繩に計敷のぬりハ調
宜也床より事敷ぬり何より是れ繩をべん
ゆ唯衆を扱より後人持物を取よりぬりなるに
要し一傳の要ハ重の席薦にハ其積累此敷敷を
いふ今我國小敷の床よりぬりハ持物を取より
いふ物もしてハ重の床敷よりぬりハ持物を一合より重收綴
りて敷きこしきもて床よりぬりハ持物を一合より重收綴
りて敷きこしきもて敷きこしきもて敷きこしきも
説文小席ハ藉也又陳や字書小席ハ釋也と云く
可卷可収と云き故ハ扱乃席を以て敷きを作たる其
を收ぬり此名有る多に於て合て敷きこしきもて敷きこしきも



一者裏席

二者裡薦

三者陪稿薦

四者胴薦

五者豎薦

六者蓆薦

七者掛蓆

八者表席

此則八重の席なり惣合して畳に敷くは金殿
尊室の多ハ則尋常に寸尺を増し長幅寸小也

真行草位

神代は三牀と設きて初中後有りて今も是をかし
真草行をあらわし中鍼を刺し亦おのつゝ法々
倭漢名數は日進く長して上小見ると陽こ
下は藏るを陰こは是より上る計を陽こ下は
計を陰こは雄刺を陽こ雌針を陰こは掛
縫を陽こ粒縫を陰こは臭位と上は行位を
中は草位と下は外は男位と女位と
老子の曰三三萬物を生る故は三位と云ふは更小
男位を置尚奇偶を以て多に又縫破糸の量分
寸の數目も曉る

真位 雄刺五分雌刺二分伏縫の間七分搦の封目半

揚きハ浮うゝこもふき廻るの裏より裡付の
床よりハ席はこしゝり糸うゝるなり
上の床ハ多きゆて是を編み次ハ少きゆて是を
果けり多きゆて是を編み少きゆて用て編みあり
住者ハ少きゆて是を編み用て用て用て用て
男位ハ少きゆて是を編み用て用て用て用て
大槓これにて又ハ大ハこもり多きゆて或ハ
是といひては修補するものありや
たての太さもや男ハ編めて陪草を用ひ調ふなり
二府編み稿のハ斗拵て是を形するなり今ハ
男位ハ薦とお用て用て用て用て用て用て
上床ハ糸にて編むなりこのこと又名づけて
おめて用て用て用て用て用て用て用て用て

此分本ハ部すに分に縁を成き又裏目もハ縁小
陰陽をとり作り作法を調るなり

畳爲嫌病

自家傳曰新本小表縁を付る母搦板の入り
ずるより作り作り此ハ小縁分刺細は搦板
ハ矩合のありより搦初刺止の糸にとひ切して
あるものなり也又板入の要なりともあり
滑くおしるなり板をいれはてん者——
いりおす——
いりおすハ病あり

四方の厚薄矩の長短 縁底の高低換り頭顚
搦板の類仰系此生固 表席の裁曲面の刺荒

表席の敷上座筋の唱斜 平刺の廣狭糸の弱占

縁面の艶損織目歪枉 四隅の類伏小角の死活
右ハ古人の金玄傳より以てしに此中門才子に於
に此類をいふ者ハ良工の名をいふ也——

板疊刺様

板疊の刺様多く見らる小板の幅一杯ハ表席を
裁合て平刺斗を成して足縁の付方ハ縁針を以て
搦す小ちりて作業する者間いしあり又縁小
調てお搦のより折也である者もハ要小縁針をきく
り我家の如きものぞ唯糸のよりしてなり——
調へ其美會有也——自家傳又表主此言なり

又板の裏の横木を端ハ板の枡より三寸程中へ
引込おせ置然し一より又板の横木板の端は間かく
て有しゆり是ハ引く此行あり皆是れをとりつゝ
能は成す此單傳より先板をハ板の端の下小串
より八分半目ふらさし一此板を次ぎに操あけく
扱かすこの裏ハ板より縄をこつちけ置は節節の
束なる表席を操て扱ひさし一と云ふ板の裏ハ
細縄をあてゝ置く將は板一より束の板を割月
荒て見苦お縁面廻りて又板一返通る時縁月
を束わすしやて扱ひ置は節の縁よりわらふ束を
折て通しふら置枡の封板よりふら置は置る

繩へ掛通して締むるよりかくれいゝゝて宜威乾く

板席兩解

凡貴人等の板ハ必き席を鋪設も夢菴主
云小板等より間單席を用ひる形を操り其
座敷より四隅有て寸尺の見掛若お事なり其前
後と柳葉のめくにて寸尺の老かへんは先鷗
首の真中より抽り正中へ繩を引たるを右側の幅上
と可嚙に圖合して後宜く裁合をへ一扱又座敷
より鋪則ハ何枚と仕るより一小舟かど小へ表席
板
板乃長程に續合せ或ハ長板或ハ板敷敷有とあり
テ板の物ハ續置る裡と表を重ぬて枡計めて

手造く引張糸繩を引渡し表席此目を直にして
支側の幅癖を考へて一寸五分を按小引渡しきり
糸此内を矩のあり小くして先に側つく幅癖
を試み裁合して取り假縫として縁を縫ふ之廊架
乃鋪設も亦かゝれいぞ

紙縁畳説

夢々席小紙縁を付る事古來の制作であらけ故に
舊道傳より曾て聞くの夢々主云紙縁の仕
方ハ濃糊を拵中に布を包て厚く作らるも何れハ
恰も皮のちや——是を刺した針通りがち作られ
水もぬ——和へて平刺をさるんお——校く

其種——折目を付た縁板常法とち作るなり下
まハ矩合弱く表席を裁て置——高き紙縁を
取ら流し中に乃高縁の矩合も亦夢々不同
に隅を作り縫ふ又糸を以て隅の縁をぬりて
高き方に角を付して置——ち夢々紙縁を
付は流しを縫ふ付て置——各別厚さし巾縁ハ
針先をわ——三角は麻を刺すにち通なり——考へ

くち縁西説

自家傳小田原より——夢々も亦佐背此制作あり
田舎間のちめて関東に於て鋪設也是は刺に
刺しと欲する小先より取り席を水も流し——並板

其間の鋪居或はよせ木の曲直を可囓ふまゝに
折り空を縫ひ薩摩此國に織せる席はまじき
厚して長幅す小太きものは裁きおける時床の下
に補ひに弱く裁合をへ併又弱きところ付き
表席ぬき見て見苦おもしろいなり
愚案に琉球席は近き席の堅案の所をわけて
手際より併矩合をあらしてほら系より間溝を折付ぬ
小かどうあるに立丹をいれ是は能く人と欲する付ハ
先より裁けりまゝにおひし通つておひしをね好む
の矩合は幅弱くあるを付定あをを計きまゝに裁
引く所を指し力を入れ込みを付きまゝに威者く

兩面畳説

自家傳は曰ふ面^{揚置}畳は最良工なりにあふんバ
宜出来りしとあるがう家職する則ハ其仕方
能心得をんむあつては人太きものも長も短も曲も
直も初は表席の時能お調ひするを寝と縫合を
其幅ハ床の寸を随ひ縁を也扱又別の表席を以て
床の裡に縁をば縁幅通例ふして換り村をまき
増ふぬし縁を打たして縁の底を縫ひたる小頻平の
より厚き縁を縫ひしに隅を縫ひたる縁を縫ひて
竹節を直小糸上縁下縁の模様を考へ上席の
裡の糸を掛し縁を縫ひたる下は一箇中同じを縫ひたる

右に縫將りも可なり襦を穴穿るに押さし針を以て
解引るを付打とて襦を封ふ裡の曲り小肉摺を
付てよみし禮般置置もは振く様也——也思按ふ
揚るの縁多く大紋或は其外をくみ中より
大紋顔極るを見替——也えき及或之のよしん
を考ふをあら——は立ぬハよ

茵褥別解

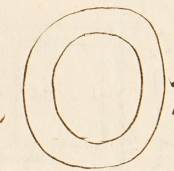
倭名集は野王云^{音因}茵唐韻は褥^{而買反辱此間述久}
^{今案毛席名也}茵褥又虎豹の皮を以て作る俗揣り皮等を以て是或
他は氍毹也^{一名班枝花俗}糸小貴人此等を借て蒲團を調
褥の如く縁をたるとは中納^{氷蠟燭イウ}班脂花^{或ハ}

綿胎を大和物語は曰褥ハ絹乃縁をてといひ又
是は備用ひく夏の褥なるをハ表席なり^{夏亦ハ}
せん^ハあ^ハ浮^ハ茵席を以て褥もを裏を中納を
綿胎式ハ^ハ科^ハを^ハて^ハて^ハ其^ハ皮^ハを^ハ福^ハて^ハ稠^ハく^ハ抄^ハ穆^ハ
けく裡席へ取く^ハ荒く^ハ造^ハり^ハお^ハ——縁幅^ハ廣く^ハ
て四隅ハ帳面を面縫なり縁幅ハ湯敷を以て
以て——い^ハた^ハい^ハく^ハ糸^ハを^ハと^ハと^ハ或書ハ曰ハ小
蓐といふ物なり蓐の如也縁ハ曰^ハ夏^ハ蒲^ハを^ハ蓐^ハ席^ハ
と^ハなり^ハとい^ハて^ハ又^ハその^ハの^ハ鋪^ハ席^ハの^ハは^ハ振^ハも^ハ大^ハ略^ハ褥^ハの^ハじ^ハ
候^ハと^ハら^ハ大^ハ方^ハあ^ハ縁^ハの^ハじ^ハ

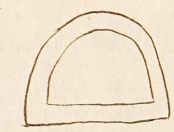
辨席——

此拜席ハ禪家ノ最用ナリ其體採拾尼師檀ハ坐具
 小ニ佛ハ割ハニ尼師檀ハ式ハ四ノ也佛弟子
 迦留陀弟ハ少ナリ一ニ座具ハ一佛小對一ニ
 是說便更小廣長各半捺手モ増スル事ハ
 聽ク此モ是後ノ聽スル也戒疏曰更増ハ縁開ク也
 如今座具ハ下ニ敷ク拜席ハ其人トモスル事ハナリ
 此席長ハ八廣ハ三ハ四ハ縁隅縁合セ惣縁幅一寸
 九分式ハ式ハ五ハ四占モ着四寸四寸也縁ハ面縁ナリ
 板又折ヌム佛ハ先表モ申テ一ニ小ハ一折又正中
 あり二ツハ折合ハ一ツハ折合モ表モ貴生礼拜の時
 折合モ佛ハ外端モ其人の御座モヤテ端ハ内端

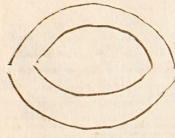
を以て事ニ定むる所ナリ月かくのこゝ



此一系ノ席者折大板ハ一相のこゝこの
 圓席を以て九席の元ナリを實ニハ各
 相礼席として何モ主客モ早モ論モ人般悉經云
 皆同一相所謂各相也故小損益ナク又力隅ナシ

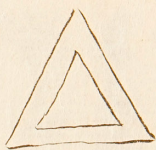


此一方ノ圓席者雜善行モ棟ノ正席也
 涅槃經云一善を修スルハ百種の惡を破ス又
 華嚴經云圓教ハ一行ハ即一切行ナリ是を以て
 此に自己小ナク一ハ後人境ハ一ニ相應せん

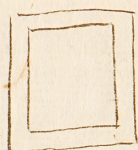


此二角之圖席者欲求有求ハ二求を以て各半
 象双角の圖席を爲像其二求ハ成實論云

現在の諸欲を求め更小後有の事を求む是也活
法に後世の因を断ずんと欲する今世作業者是也蓋
長短方圓惟器の便を以て適する佛神の力なり

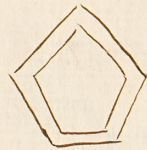


は三角之圖帝者三界の標示也所謂欲界
色界空界なる此中の諸佛諸菩薩諸善
神等此一席小礼敬を故小三方其平均より宛
三妙觀一心を離れざる一其妙觀は厭離
有爲心求菩提心度衆生心なり

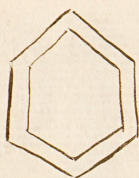


は四角之圖帝者地四の數を以て四角四面を
爲る蓋地神是を掌らん故小平時安然
こゝてす取を得たり當に知ふべし此席上小

在人の道德を小随ひ四輩敬信する者其人あり四念
處小住せ人曰觀身不淨觀受是苦觀心无常觀法
無我此席は四時小随ひて四方をたを思ふて一斗
を以て春秋こそ則ち一斗に兩縁のこ

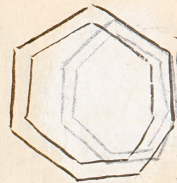


は五角之圖帝者五徳を以て体用小摂取して
求願成就の礼席也礼は即是體席は即



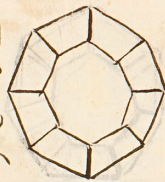
是用所謂五徳は温良恭儉讓君子是思事は亦有
此六角之圖帝者即六道の行を擬て曰布
施と持戒と忍辱と禪定と精進と智慧也
是菩薩行道の根本にして萬行體中小圓也
六根六境互融して功德を具し速小佛身を成さん

故小六方同數の席代以下一切の佛神を頂礼する也



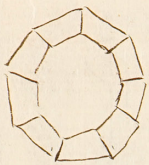
は七角之圖席者勤那三藏七種の礼有し
おもむき今斯七角席を制す曰我慢礼

唱和礼恭敬礼先相礼起用礼内觀礼實相礼是之
中小就我我慢唱和の此二儀ありは礼席
に在て孰く其を以て所らあるんや



は八角之圖席者八方小象より以て八節節を摸る
特は是佛神を殊敬するは法席や春秋八王
日といふは立春春分立夏夏至立秋秋分立冬
冬至是也淨度經曰八王八節日也天王案行し
此諸天民衆を以て福有ハ壽を増ハ罪有ハ

算を減む宜實知る者なり作善は自らを救く
地獄はよく如來拔苦救済を勧修する事其を
あてふは——を以て所らあるんや



は九角之圖席者九品を配る觀經曰上品
上中品上下品中上品中下品下上品下

中品下下品是を重疏鈔曰事理の一心を雙べ
得る事深淺あり故は三品を成る上中下三品に例をば
事為盈理歟又深淺を以ての故は三品を成る中中下
三品を例せし實は然り念佛の行者宣は席を出入り
所唯心の弥陀已身の淨土を拜敬する小利なり

江家次弟

同上
疊

却

後代

二色續

去
敷
同

荷

同
上

白氈

帝
上后

易席

漢事

江州

帝
上同

官席

帝統同

同必之七書

ニツク

帝
草

王莽

唐
西

圓

管圓座。深緣刺席。薄緣。古敷。薦。筵。蓐。蓐喪蓐也。
古小多。豪結。或ハ漢澤の草類を編成して席く今
て倭漢より華を好む時世の憂能を觀る也。

薦之品數

倭名集に曰、薦古毛三才圖會に曰、神農床小席、薦ハを作るハ此ハ凡ハ高ハ穂ハと薦といひ、莞ハ乃ハ蒲ハと席と云ハ梅ハ乃ハ薦ハハハ藁ハ穂ハと編まハるハを作るハ高ハ乃ハ莞ハと織るハ、延を作るハ片目也、莞ハと織るハ席ハと他も雙見ハ凡ハ稻ハ藁ハハハ清ハ淨ハの物、神佛の用ハ皆ハ以テ新ハ薦ハと云ふハ、薦ハハ幾ハ内ハ境ハ乃ハ名ハ立ハ生ハ小ハしてハ古ハの系ハ人ハ是ハを好てハ救ハふハ、匱等ハ此ハ天ハ井ハ小ハ成ハしてハ祢ハ美ハをて京ハ師ハ河ハ原ハ町ハ乃ハ住ハ

何某の叔父を以て薦を用ひて之を爲すハ編也
 其事も亦然なり清お納之此草紙不更又刺薦也
 清——に身也と云ふも然り是體輕くして用字此物也
 玉篇曰木の葉を皮と云り天を多する附
 鞞玉篇曰木の葉を皮と云り天を多する附以て席と云ふ又指し作と又結まつる
 薦ワラウニキモノハ藉也薦席又

ハ蒿をハ薦と云ハ莞を席と云ハ又牲を云ふハ薦とい
薦ハ牲を加ふを云ふ又曰庖人品物を備ふハ薦と云
薦ハ進め献するを云ふ陳也又曰薦ハ獸の食する所の草

撫玉篇
 長薦延喜式
 第筆頁薦同上弘元余長九尺斗
 葉薦同上
 十府管薦

新勅撰羽藻江家次子人食薦同上篳篥同上巢苑北薦集北國花苗北莞薦名物骨

力薦墓目薦口傳
等也又いふに
體異る物
傳發
倭名集之
漢語抄

蒲の防壁ニ云有下り集集暖簾八番席也

蒲筵 蔣筵 葦筵 裡筵 芝蓋 輶轎切

曰西復席說

自家傳曰 乘物乃涼 西復新小作るに其寸尺を試む
糸物の上持の一角より持端へ尺板を中てすす入
檐端のちを増しては方同持より縁幅陰敷をす意こ
も持端の増幅は方以上見計いしめてかまもの
縁の中へ八寸長き竹を中に削りて穴代もみ持て糸を
括り入るなり 併し突楊の西復ハ何ヶ所も入ぬ
持の上へ席の檻縁まで持幅をすむひて紐付べし
物又具是竹の目西復式ハ糸并當此目西復ハ糸若かくれ
おし——亦弦校糸のや後ハ其寸尺實おして四方へと出

下よりを四方縁よりして隅小紐を付ぬ——此縁幅より
常幅よりおしとも易きに目西復ハ方いしへの物をち
紐は表より席を用いて作らるべくハなり——性堅く
蒲筋曲をこしは信とすむも亦おし——きおさかへ
紐の針はういハ面紐のいしとすむとあら——さし
いしゆとすむ——いしゆ——いしゆのもの也

鉦鼓席傳

自家傳曰 鉦鼓の座を作らん欲せハ其鉦鼓を
徑の寸は縁面を巡り皆取るべきと吉とす好小使を
其持座を以て——又ハ表席をゆき板ハ幾重もかすね
縫て其座中に穴を開きぬ——此鉦鼓の大小に穴

そつて表縁を以て花の形を以て縁を音に縁を
出〜〜〜云々〜〜曰く花を以て縁を以て縁を以て縁を
切あき〜〜縁を以て縁を以て縁を以て縁を
中に包〜〜縁を以て縁を以て縁を以て縁を
陽縁を以て縁を

單縁圖說

漢事始曰拾遺記小軒皇黃帝也百辟群臣を以て
主を以て蘭々浦の席上に列ねるも又韓子より禹王
將席を作て縁縁を以て縁を以て縁を以て縁を
純縁を以て縁を以て縁を以て縁を以て縁を
徒然草文段抄より蘭々の上より縁を以て縁を以て縁を

縁を以て縁を以て縁を以て縁を以て縁を
を同意也譯文笠主蹄曰單ハい〜〜と訓を
縁を以て縁を以て縁を以て縁を以て縁を
縁を以て縁を以て縁を以て縁を以て縁を
字我小桐紙に單縁縁を以て縁を以て縁を
集は單縁縁を以て縁を以て縁を以て縁を
あかまの縁を以て縁を以て縁を以て縁を



四方縁縁を以て縁を以て縁を以て縁を
縁を以て縁を以て縁を以て縁を以て縁を
縁を以て縁を以て縁を以て縁を以て縁を
縁を以て縁を以て縁を以て縁を以て縁を
縁を以て縁を以て縁を以て縁を以て縁を

よく後上の縁をうつろひぬるやね又ほろろ帳面より縁
をぬけけとゆふハちねい—— 案に物を覆ふる
天は徳—— 物を載るハ地ねの謂成金——



裡身床縁お襦袢裏あのかね一文字り
糸連り間断すこととてふ—— 又一方

席の目一つ間を隔て縫將けを下さる—— 一
横は乾坤の象形を備て法位を可からる



偏席縁裏あのかねハ表席の織初
のうも上をさる—— 別室を添くまあて
糸つひハ一文字に縫將け下ハ席の織止メ—— い
の形かくれい—— 是をふち掛といふ右圖の

糸面則天地の法位なる

畳師諸具

曲尺 世人多ハ尺段をいふ倭名集
太加波加利和漢名数よりし 水繩 名物大貼水繩
度と割を狂直考 尺挺 天の七曜の明を
兼て長七尺

定木 同長尺字或ハ定規或ハ裁木
槍找をて作るを吉トス 幅度 長三尺六寸二度ハ
八寸丈尺引 長尺 長八尺ハ方ハ推槍
找を吉トス下略を云

携定木 長三尺六寸二
槍找を吉トス 大曲尺 横三尺六寸六分縦四尺五寸
幅一尺二寸見合槍找吉 畳檯 高九寸九分縦大尺
六尺五寸三寸八分

裁板 横幅三寸長ハき間
或ハ間中原木を用 畳鏡 新添の具也
別作法を 八與規 同
上同板或ハ槍

床縫針 中田各名を床針トス
第一文殊作吉トス 平刺針 上田各名を刺針トス
第二文殊作吉トス 縫針 中田各名を縫針トス
第三文殊作吉トス

無圖針 夜差指
針を 柄刺針 同
上同板或ハ槍 簡助直針 作吉
針同 鉞匙 作吉
針同 削刀 鉞
針

携鉞 上田各名を
携鉞トス 庖丁 上田各名を
庖丁トス 曳引走切田 縁中
の折目を切る

系引流 大竹と
以て作 衝曲尺 考器之
程吉 鉞 和名
加余 携鉞 携板の
後穴の間にちく

鋸 上田各名を
鋸トス 錐 江戸鍛冶
の作吉 鉞鉞 同
上同板或ハ槍 累尺 繪圖
の作吉 堂手章 手裡に付得るの皮なり
三々智を象る

油箇油は内 薦編折或ての表裏の 搥子或曰つう、こ名と呼人もアリ

杜秤礪砥等こも編具也

墨鏡圖解

此墨鏡より小物と家家の道具ありて其所用最久
凡十品品の御も其則ち小物と規より矩とあり
併つといはるる時と處く墨を待てしめて其
より隙を貫きまゝに人平古人云る語より
君徳を授けりといはるる制作する道具あり
一布をを用いて重宝に成り又おつて八要規
を割き此御ハ八徳を傷く自里なる者也四角隅
度りて其用を御達し一ハ尺杖二ハ幅度三ハ定木

一ハ長尺二ハ規六ハ卦引走田七ハ折換敷居
の高低を考へ八ハ墨をこして其用あり
墨鏡の御ハ八要規小所用を増す四品あり
水繩よりこして敷居の出入を割りす隅す新割
の寸尺を記しより其たり不足を記す三より
大曲尺よりこして長さ文を記し延綿の御
有る席間を記するに自中より併みたり
此より竹を記しより併り
道具を記しより
墨鏡の長さ上四尺七分柄の長さ四寸於合は八四寸
七分也平面の幅より七分横幅八分つ合てき寸

六分也折戻の長式すみ分折廻りさす寸分百子
 ま分半横より曲入の目と感面する也

たうか金全作し圖

是ハ右の一挺の柄を以て真木と抜出たる終のやうなり

ハ長三尺三寸三分平幅ハ分横腹六分上ニ幅半裁の
用をしる下ハ隅行の目と感て先曲り柄を端親とす

ハ真木下ニ有ハ柄を離したる圖ニ定木長尺大曲尺の据木ニテハハシ

ハ左右二挺ハ第二版目の一挺を二ツニ離し

ハまてハまを振分ま入らふせはまてまて長尺とす

ハまてハ二丁のこぶちをよめてまてつぎ定木とす

ハ組合さハ右別し
 三丁より折戻の目へ
 わらへ柄をみわけて
 つぎまて
 大曲尺とす
 くりつ
 する也

まの形を長尺ハ二寸三分平幅ハ分

隅行の目とりて長版をわ

ハ定ハ二ハしの付用也

ハあうのわらねハまのまてつぎてまてつぎ

ハ定ハまのまてつぎてまてつぎ

ハ幅ハまのまて

ハ定ハ二ハしの付

○

ハ定ハ二ハしの付

抜出さるやうなり

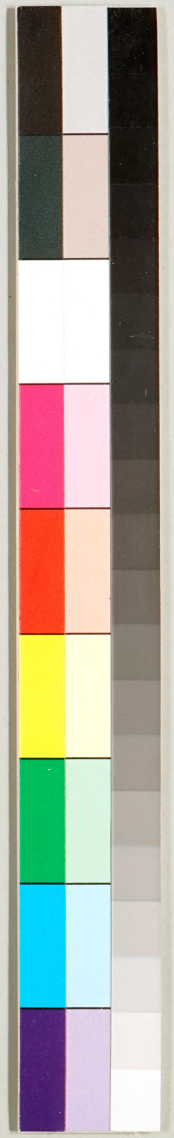
ハ定ハ二ハしの付

ハ定ハ二ハしの付

ハ定ハ二ハしの付

ハ定ハ二ハしの付

ハ定ハ二ハしの付



玉篇の注は曰禹貢三百里ハ稽服を納る稽高木なり
或ハ韃ハ作る記の礼器蒿木韃ハ設。注ハ穗を治め實を
あるを韃ハ云又韃ハ作る通して蒿ハ他ハ前の地植を
三百里夏服ハ師古曰蒿木ナリ梅子稍高木ハ清淨ニ
物ナリ稿結ハ用甚多ク一殿宅を宮作するものと亦
穀物を納貯するも亦牛馬ハ養食ニ用ナリと得かくんを
つゞけ其外ハ多クハ所用ナリ中ハ鋪設ハ是ハ人乃
安息する所の席をいふ其ハ志重クハ民故ハ其後數
の文字成るを思ふ次ハ莞蒲ハ此等款を書記し所以
なりと皆席薦ハ作爲その用物を終ハ形如

積

授。拵。摺。摺。扶。撒。凡此十八字ハ蒿草の字數
小同てゐる書ハ書道同亦取用する事あり

大目書と辨

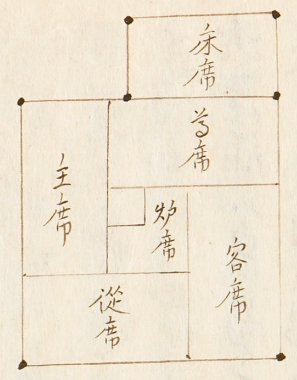
大目書の濫觴と考ふ茶湯奥儀抄曰或人宗
易と唱ひ茶會有一時多所足ざる故下ふ下地窓を
何事大目を切て。蓋し一字を入申枝乃間を留めて六尺
三寸の書紙さききみす七分半除く餘るを大目
書と号け喫茶より一紙宗易能作さかりと感せ
度し。一也然し大目書の書ハ尺七寸五分
半也幅ハ三寸五分是茶會の定幅なり
茶道全書小曰大目書ハ長ハ尺七寸五分幅ハ

定法申ねると人々寸分申ねるとさへ寸八分は
て飲食せよと奥儀抄の寸法は此ハ長き分中や
茶道具圖會小曰大目書ハ長ハ尺七寸五分也
右寸法ハ此れを考へて五分半ハ或書あり
六尺三寸の書と以て間申の事なり其五分の
尺と五分又五分折きて寸五分の六の方を右
乃間申小續是して大目と号く一也又云書の長
と短は幅を以て大目と号く一也則
四尺七寸五分ハ或人の云大目書の長ハ傳書に尺
七寸也と然る茶道と嗜む人々此を數ある依て
寸法もつらう遠いものなり是れハ弟ハ

三折あり一折又燦光の目殺のききき八寸幅ハ
 ます七分是十家宛初より此寸法也と抄南の
 人の或きす八分八金書ふもやうな式ありと云師も
 何れ又ます七分半八奥儀抄に記して古法と云ふ
 も或ハます九分八根えの寸法ありて古来の形に元々
 亦圖會より寸法をすといふ何れもかゝるやうに
 是も大同の寸法なり歟やと論するものなり
 唯ち收家考北抄圖に但せし宜切合せば云ふ

思置席之銘

四角半神の間は右其号の有るや知れんやうに
 先床布のききき席と稱し道具を主席と



号を踏込より從席と稱び其折曲りのききき客席
 之間に此客席と從席と八橋を隔てる席の縁は
 けにきききの壁鋪に稱する間々
 維摩居士の坐禪堂たる四方
 ふれぬはききき方丈といふ号あり
 殊にききき取く以て方丈の室

此佛り茶亭より茶詠は四顧に筵の介は半竹延
 と加へるやうに大匠は我政の東山茶堂より洛
 東の銀閣寺より閑の東は一亭を作る東茶堂と
 不足るに筵を茶亭也佐昔戦國の時より閑客
 の相談事は一和のり津あ合茶會と稱し主客

劒戟と貌一圍、入家来と拂い客設有りとや
然るに夢をもちて擬する位居稀やく紹鸛の空
浦に夢をもちて床はき間席也榻は間中の板の枳
椀度中おしきく鳥の子紙の白法は縁を打ちし
是を真の座おしきくせしや古織に夢を半れ
糸亭ハ京堀川通三条の南又昔の夢——こり又
有樂の長道ハの節達の板を金に圍ハ八事部
建仁寺内。正傳院は夢しきや茶話別集は藥院を
小唐浦ハ宗易と地は杖を拾圖は夢しき大より
建しきくせしきく本間おしきくぬき入地却て面白く
出来しきくぬきは敷ぬき

和席編下卷

畳天地位

大郷食録は曰畳ハ天地ハ差別は是大切の秘事あり
と兼忽と云はるねき夢を直しき者ハ法位を知ら
むむしきぬきハ天地と称するハ則陽と陰の上とを
ふや又表席ハ織初を深く裏へ曲しき天と
称し表席の織留を浅く裡へ曲しき地と法しき
天地合位ハ法式ハ故ハ席と鋪設ハ其心得あり
座おしき表れきい縁を直しき取しき
備後席ハ織初を中しき又次なる表席の
形ハ蒲節の並ありきもあらき各——

時のよめゝゝに随ふ也

畳上下位

江談抄曰、畳席ハ表、目の色、さる方を畳の上、さる方を畳の下、さる方を畳の
糸湯奥、後抄曰、畳、此指面を畳、さる指面を
畳、上布のさる、さる神保と、此方、此方又
表、目の通る、さる、さる、さるのさる、
下布の表、此目、其、さる、さる、さる、さる、
不同、さる、指面を畳、さる、指面あり、面、さる、
則、陽のさる、さる、さる、さる、さる、さる、

畳鋪様傳

古田織部重勝公の傳書曰、床前の畳ハ縁を
床の方、敷合、さる、さる、さる、さる、
指、さる、さる、さる、さる、さる、さる、
小、さる、さる、さる、さる、さる、さる、
さる、さる、さる、さる、さる、さる、
さる、さる、さる、さる、さる、さる、
さる、さる、さる、さる、さる、さる、
ハ、さる、さる、さる、さる、さる、さる、

同鋪様法

右同書曰、畳の縁の方、上前、さる、さる、
さる、さる、さる、さる、さる、さる、
さる、さる、さる、さる、さる、さる、
さる、さる、さる、さる、さる、さる、

ひきふあ合也一三三等此市代付物と有
〜〜〜書記と有〜〜也兼湯奥依抄に曰
指面丸目と申申補煎〜〜こいそ是上前也
申〜〜て表席の目録さうに皆い〜〜也

爐疊鋪傳

右同書曰数分全圖等れ炉疊ハ縁と大爐の
ゆちよと塵籠下て神合と有〜〜こあ別
兼湯奥依抄曰団炉裏也りも分半さふ〜
敷合と有〜〜こ今世も分半の方ともちゆ
塵籠〜〜も分半れと氣味なれと成〜

之間床法

右同書曰之間床の疊と上前とあへ成〜
補煎〜〜是ハ花生房板并に畳履はかくお也
床かまちれと〜〜も畳の目と兼へ初るこ
之間床と〜〜い床も是ハ准と有〜〜也

之間床式

右同書曰之間の床疊ハ上前と先〜〜
下前と床かまちの力に成〜〜是ハ燭香煙を
是ハ畳の目と先より兼へ初るなり

異床兩解

兼湯秘書曰洞床といふハ床縁七八寸洞を
切こ〜〜と号く又室床といふハ洞まゐと名刺

利休流より是を古床と云ふ也茶道要録は
曰平生八踏辺床と云ふて榻もやう上段もやう
とのより室床と云ふて是を床と云ふは
洞床といふとに記せり又洞床のいふは
壁を七八寸床脇へ切入く壁の裡へ使はりて
内方一方三角又云ふ床あり是も亦洞床と
云ふ或敷板をのりたりこれあり

小牀畳辨

き間以下の床をきき定ふといふ是は茶書に
考ふに其ふあり紹鷗床を室や讀此を間と
四尺三寸小縮めする八十道安と云ふは利休

も善く思ひあるやき通ふは仕つゝやこのか
ら宗匠に傳又ハ茶道全書は床のききに尺は
幅ハ八寸四寸や茶道具圖會はきき半敷は
きき鋪の床幅は尺三寸長ハ一方の正勝手は
小きき減りて床の長は用ひ板又にきき床ハ
長に尺三寸幅は尺三寸たり或茶書は曰小床の
ききハ長三尺に寸ハ八分幅は尺三寸ハ八分といふ所り又
間中の床より右側にも宗匠家の敷板を利
出來してかき床不同あるものなり

片畳秘事

座室の片畳ハ長さ常規より一尺持ちあがる

形を是と作るといふ一事を以て移す
むすく或書は曰く是より安座成
具體なる事なり是疊の厚さ縁也
刺縁亦大切の事なり縁忽ちこれなり
口傳又産室の腰掛りに角を作る物也同枕を
敷き用ひる物なり其形は疊は其席の中に
押さえて置く也縁此口傳常人は布を用ひ

疊目疊味

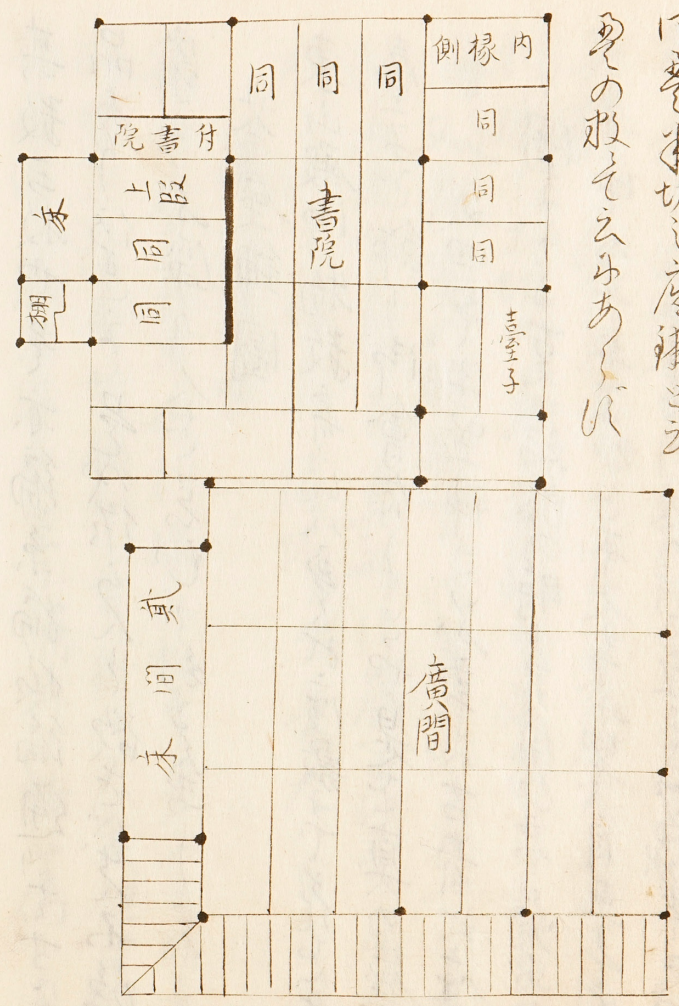
疊目疊は此疊也刺縁を秘する事やその事
勝縁を以て其刺縁止の針は其裡薦編
縁編通り編糸縁色甚小傳外は鋪薦を用ひ

其敷を扱也是亦編糸編縁編通りをす人等
品あり傳は是は作らんと欲せば先不淨の
家より不淨なる人にとむるなり

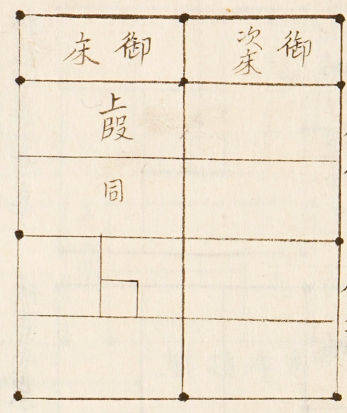
茶座鋪圖

東山殿御物敷寄に八疊此座敷にて花を置き
臺子と飾り御會有一也是は真の座鋪に
云々也又四疊半坐鋪に八疊ハ古昔此座敷
に圍はする夏は紹臨の時より用ひ来る頃の敷
より中ハ半疊はかき足す小切く自在なるも鋪
はと掛る也其後利休の時より火櫓を足すは
より古伝口より只方ハ内九寸五分に乃小座敷

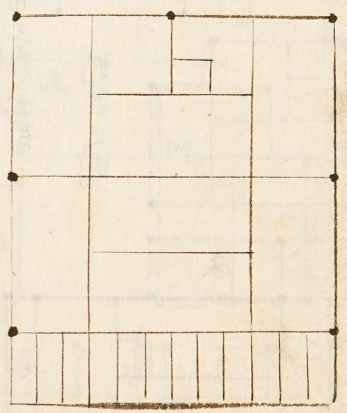
炉の上間中より八俣令八俣補之も拾之補之也
 以之半切之座補之也
 其の敷之云々ありて



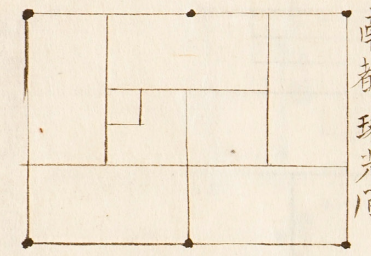
東山殿御茶座鋪



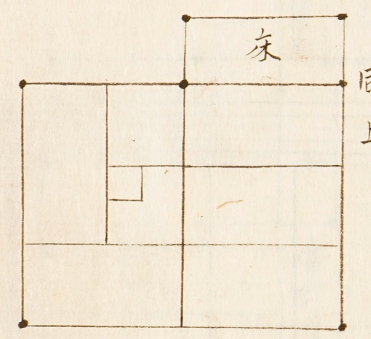
同上



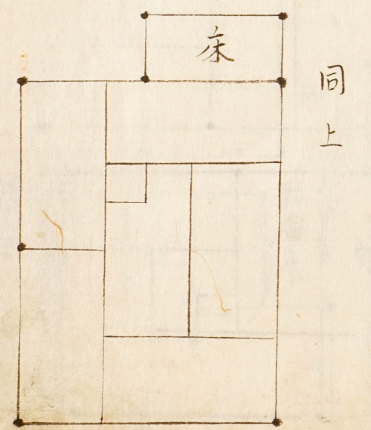
南都珠光間



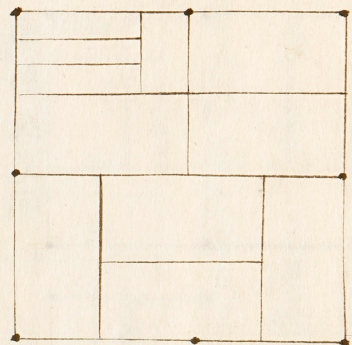
同上



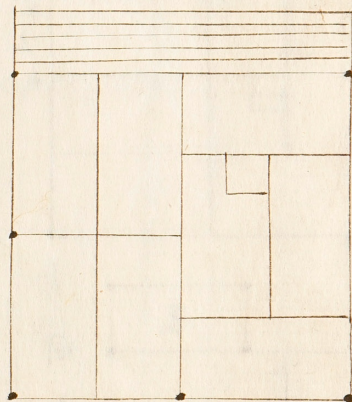
同上



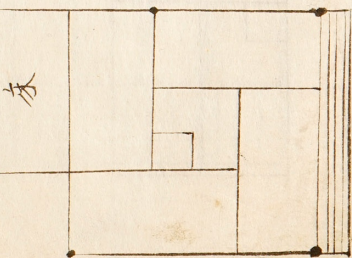
紹鴻七畧之座鋪



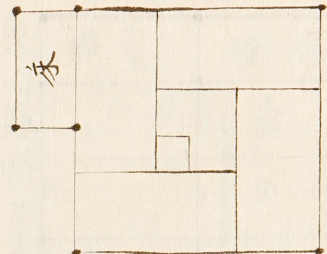
紹鴻八畧之坐敷



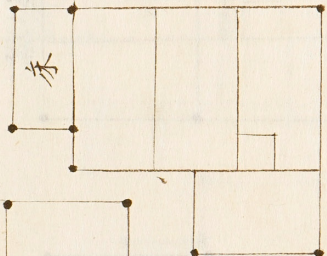
紹鴻四畧半數音屋



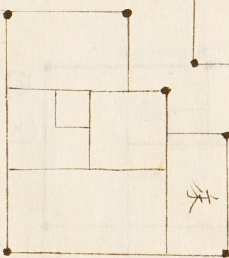
利休四畧半亭



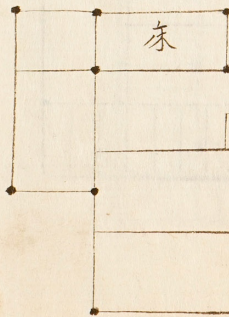
住古屋宗無座席三畧大目



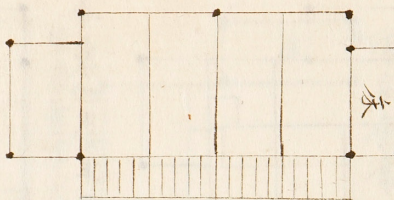
利休之圖



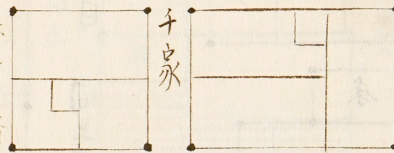
同上



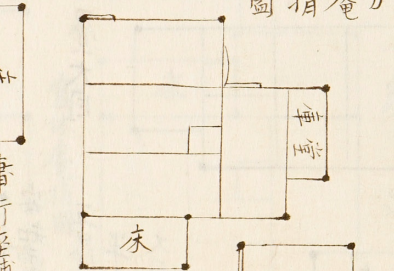
聚樂法印數音屋



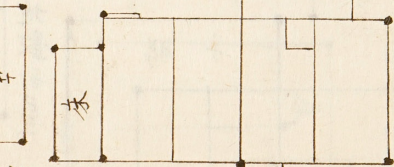
四方庵指圖



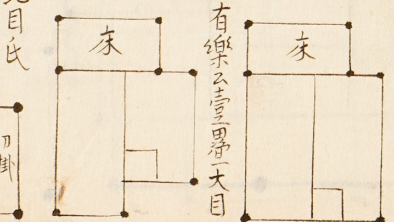
久也四畧鋪



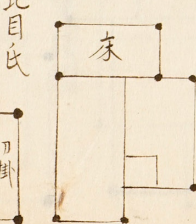
玄瑞四畧大目



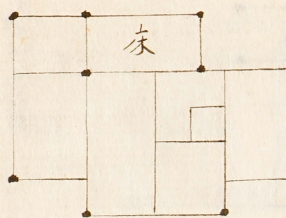
有樂之數音屋



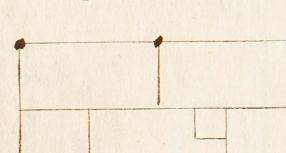
有樂之壹畧大目



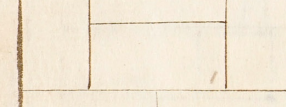
宗堀指圖



庸軒座鋪



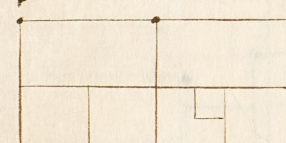
庸軒座鋪



庸軒座鋪



庸軒座鋪



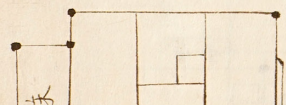
庸軒座鋪



北目氏



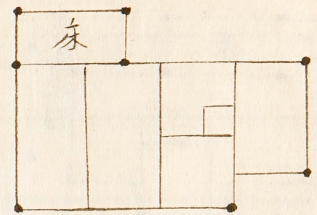
數音屋



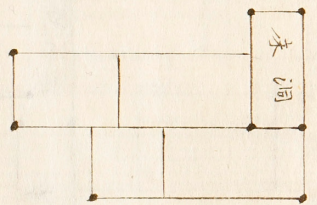
刀掛



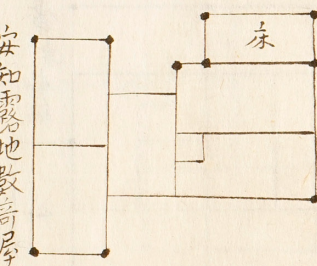
宗易指圖



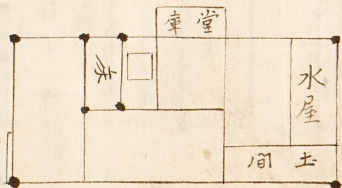
六宗通之内ヨリ出
戴疊一大半



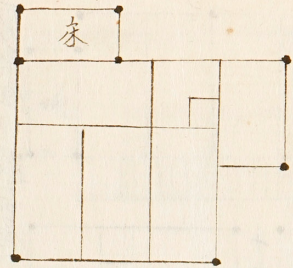
同上戴疊大目三



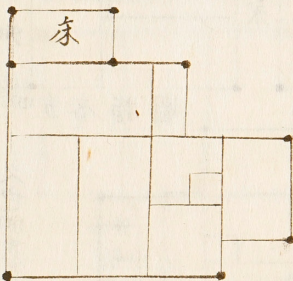
石洲公指圖



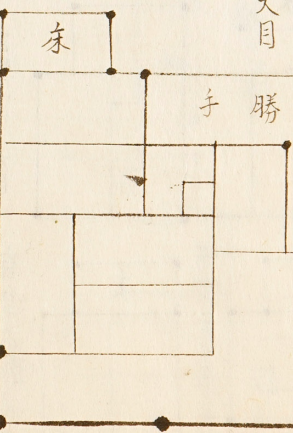
千家四疊半大目



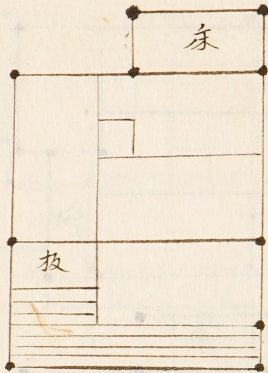
同上四疊大目



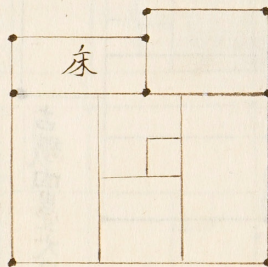
五疊
大目半



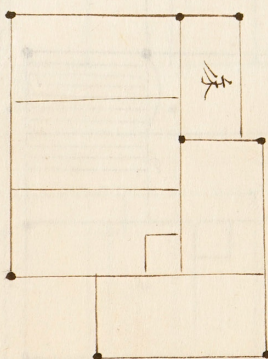
道安座席四疊



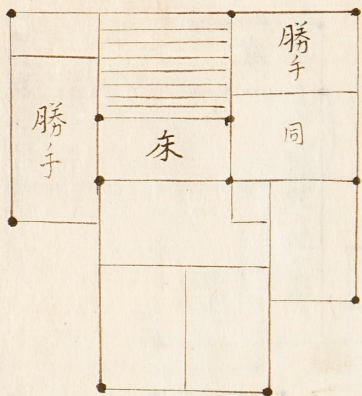
千家ヨリ出



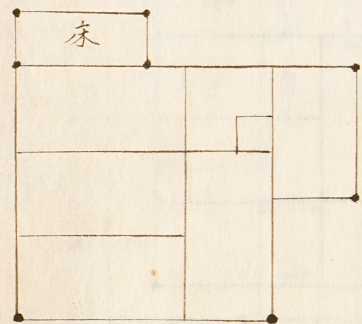
休齊四疊大目



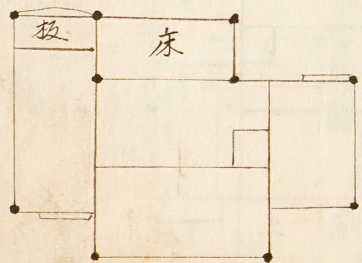
宗雪壹疊大目三



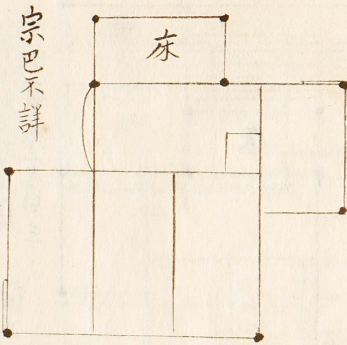
官休庵指圖



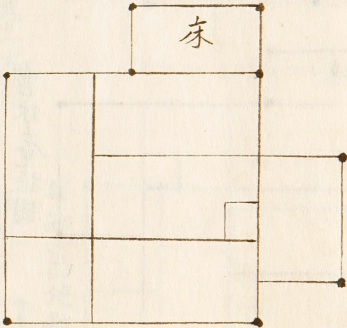
宗薰指圖



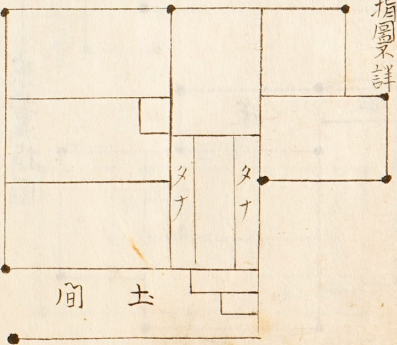
古織公四疊大目



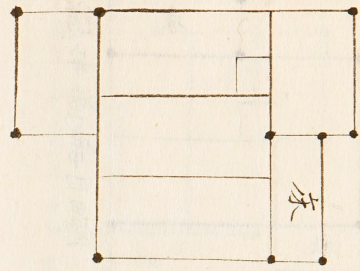
金森宗和公指圖



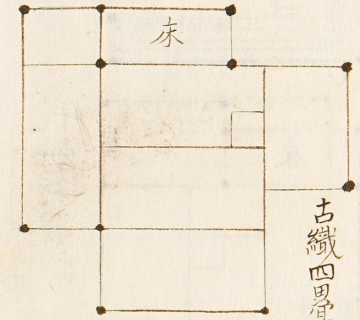
三疊大目
指圖不詳



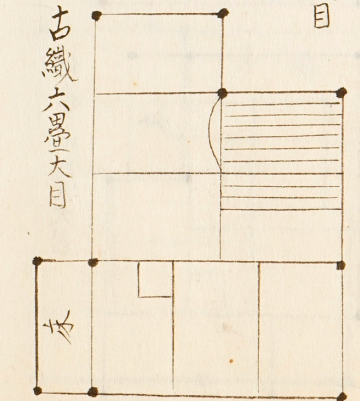
宗巴不詳



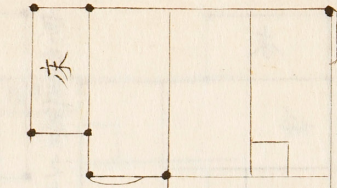
古織四疊大目



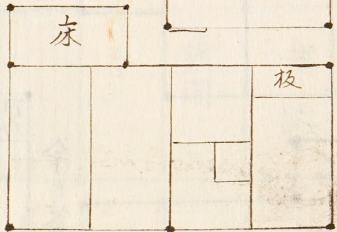
古織六疊大目



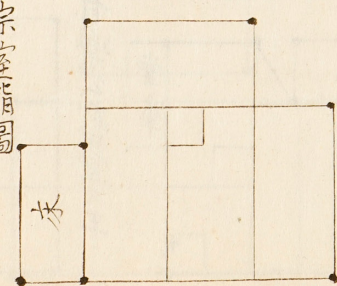
宗易座鋪



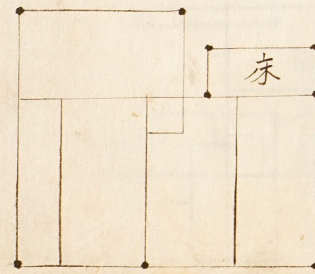
道安指圖
不詳



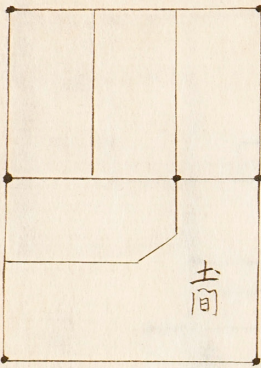
玄瑞指圖



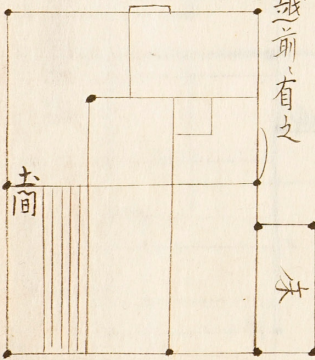
宗室指圖



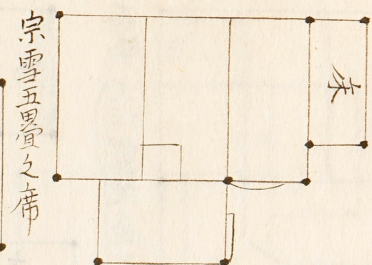
古織之作露地庭一宿



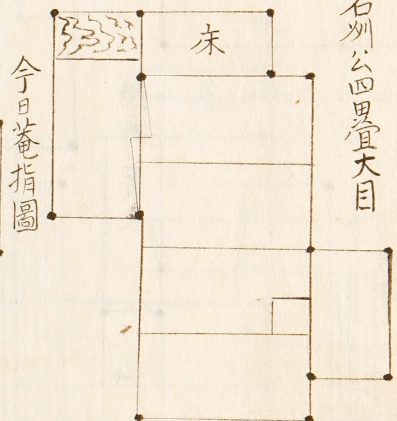
越前有之



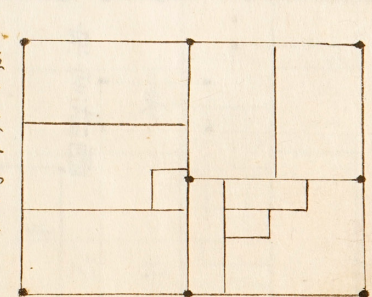
佐久間氏三疊大目



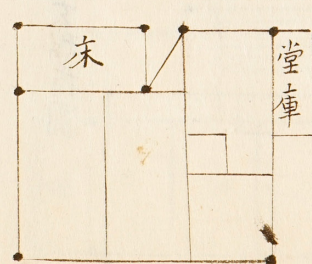
石州公四疊大目



南都子惣露地敷奇屋

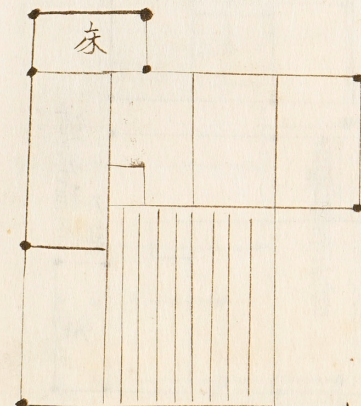


有樂公貳疊大半

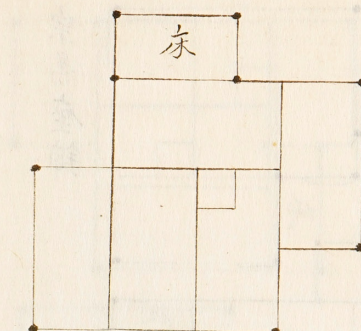


堂庫

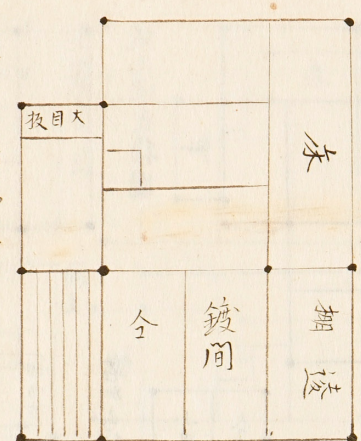
今日菴指圖



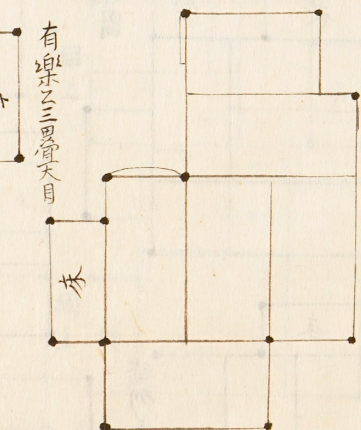
宗雪五疊之席



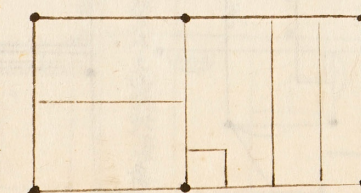
堺町市住居露地敷奇屋



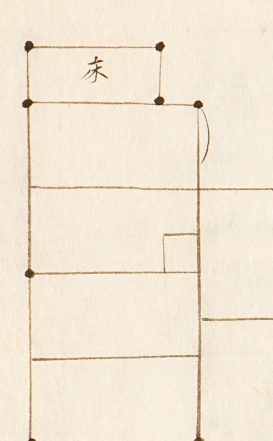
逢源齋指圖



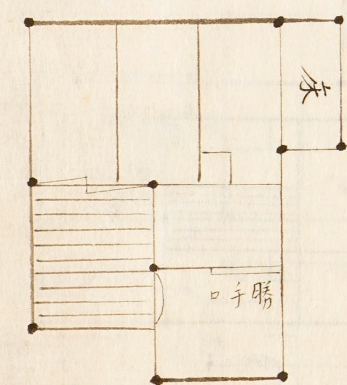
宗淳指圖



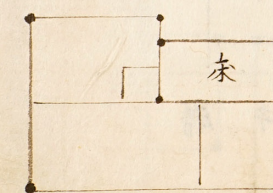
上遠列公長四疊大目



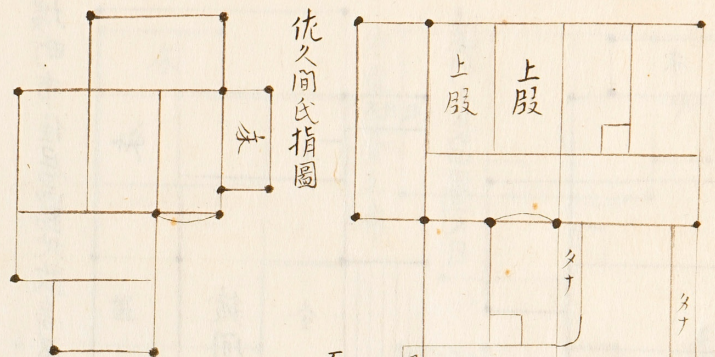
有樂之三疊大目



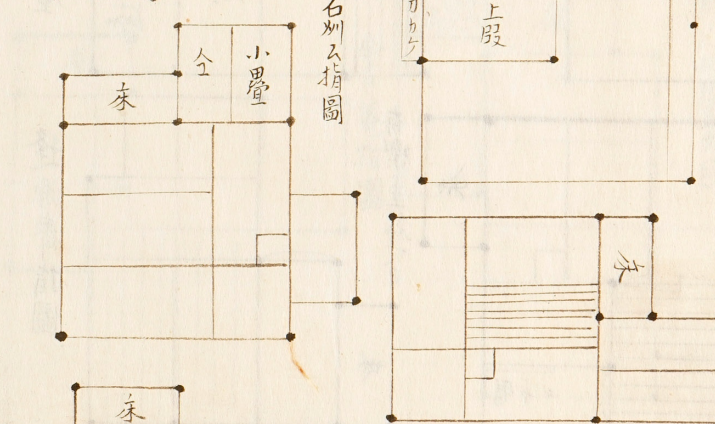
同上壹四疊半大目



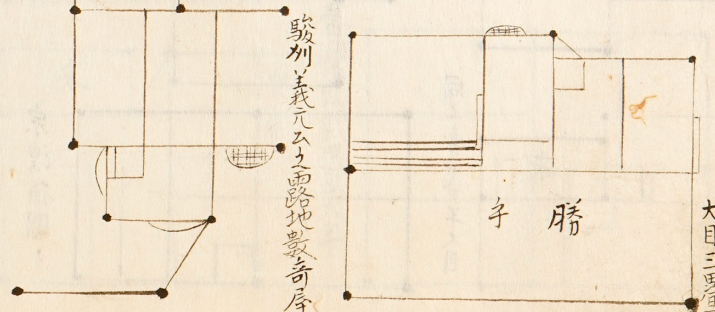
數奇屋上段住居之圖



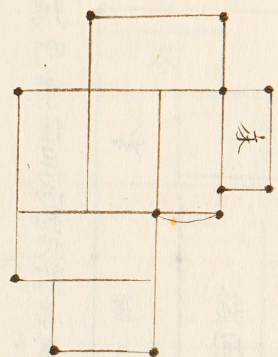
紹陽指圖



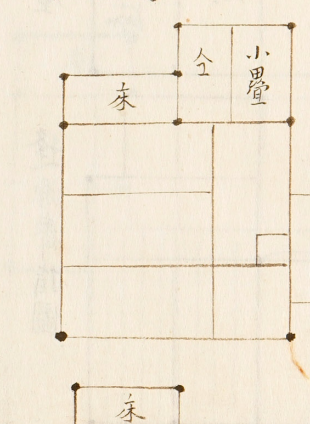
紹陽指圖平野路地數奇屋



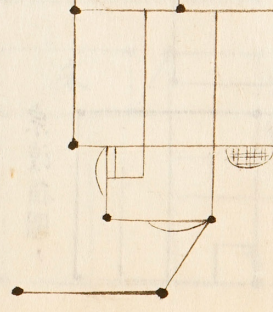
依久間氏指圖



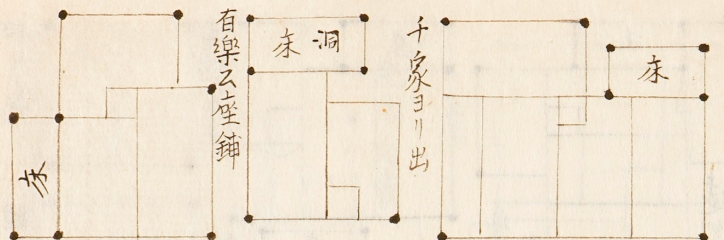
石州人指圖



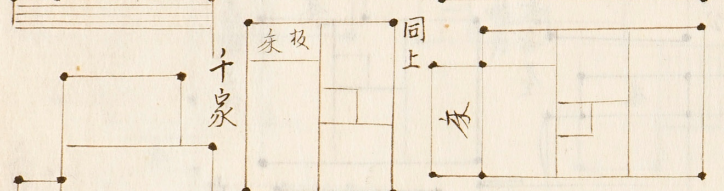
駿列義元公之露地數奇屋



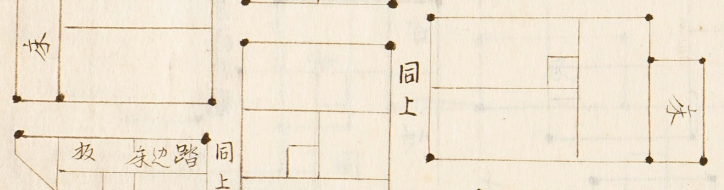
六宗也之内



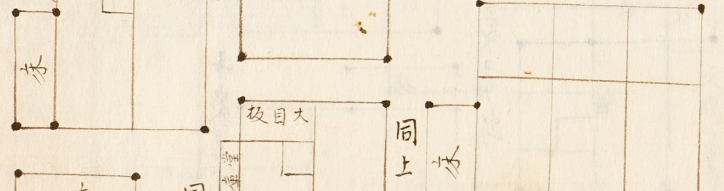
全上



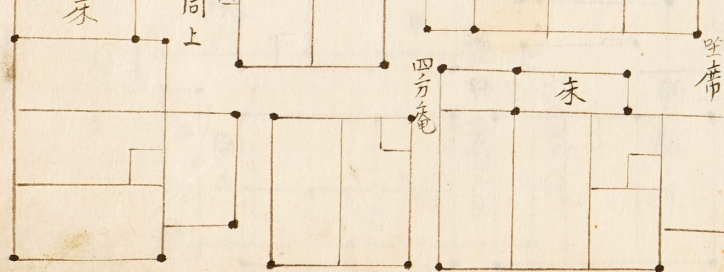
千象ヨリ出

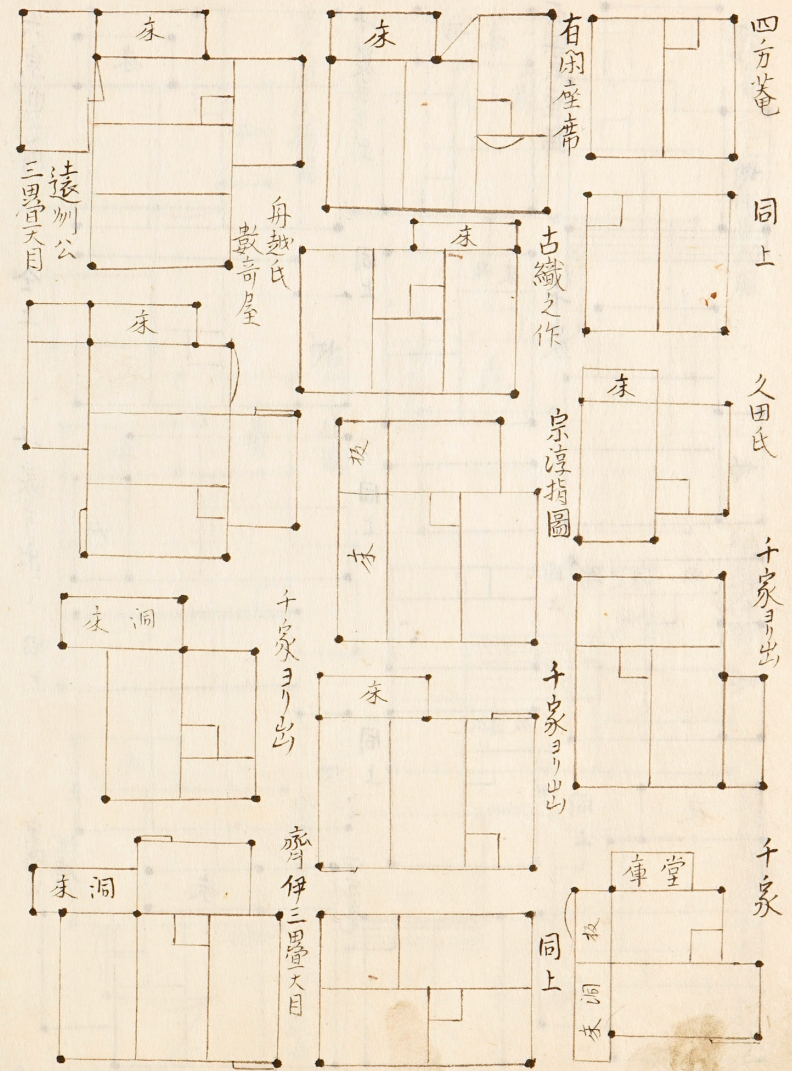


同上

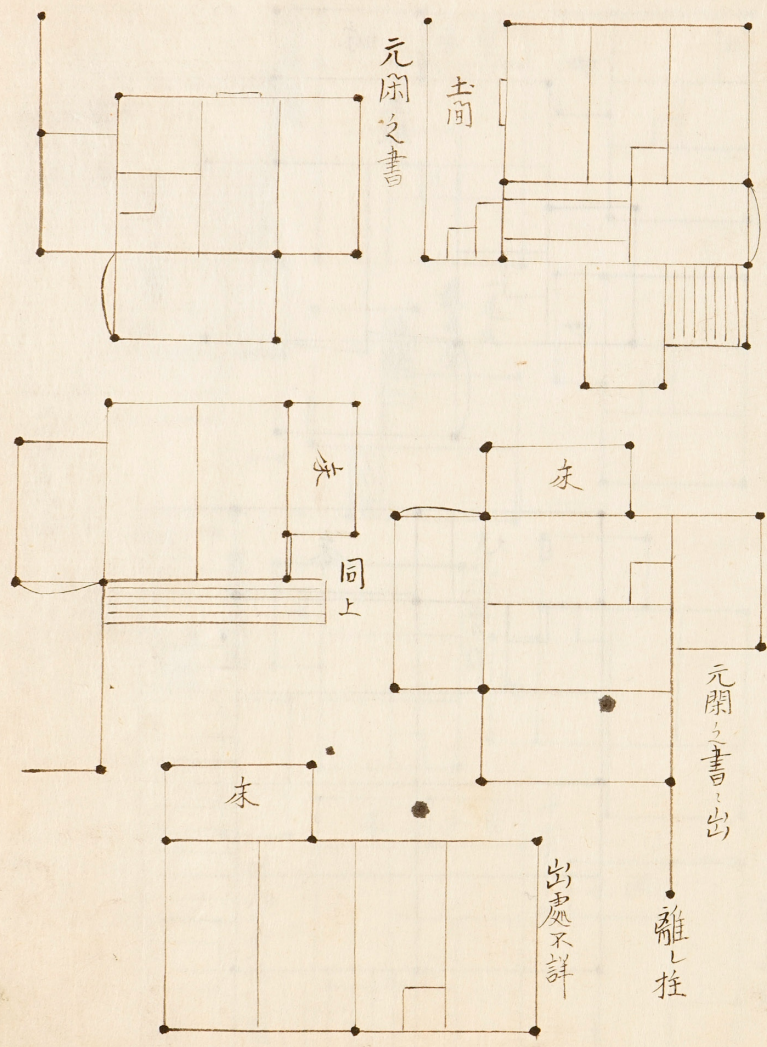


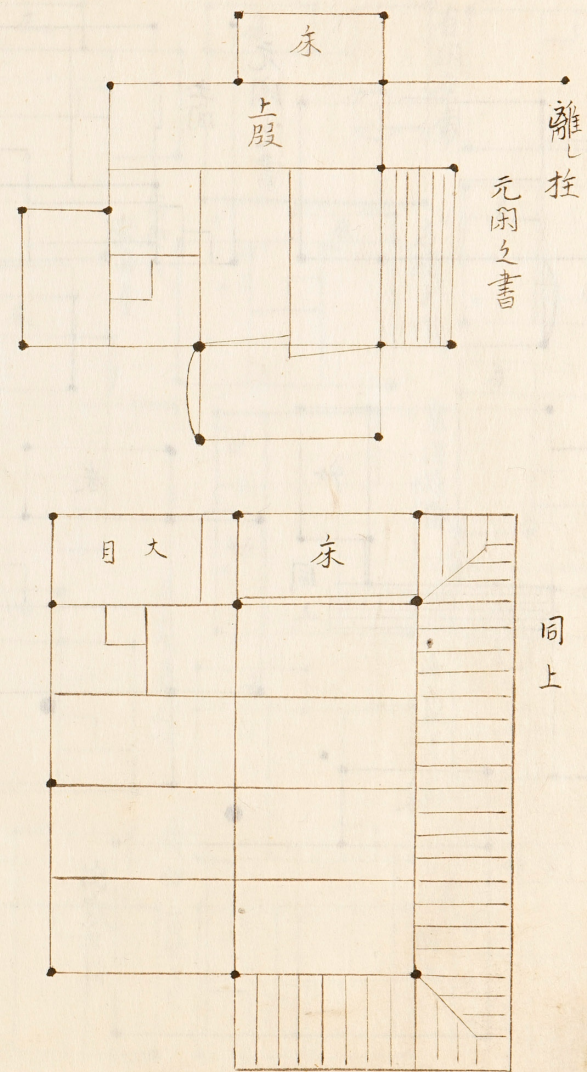
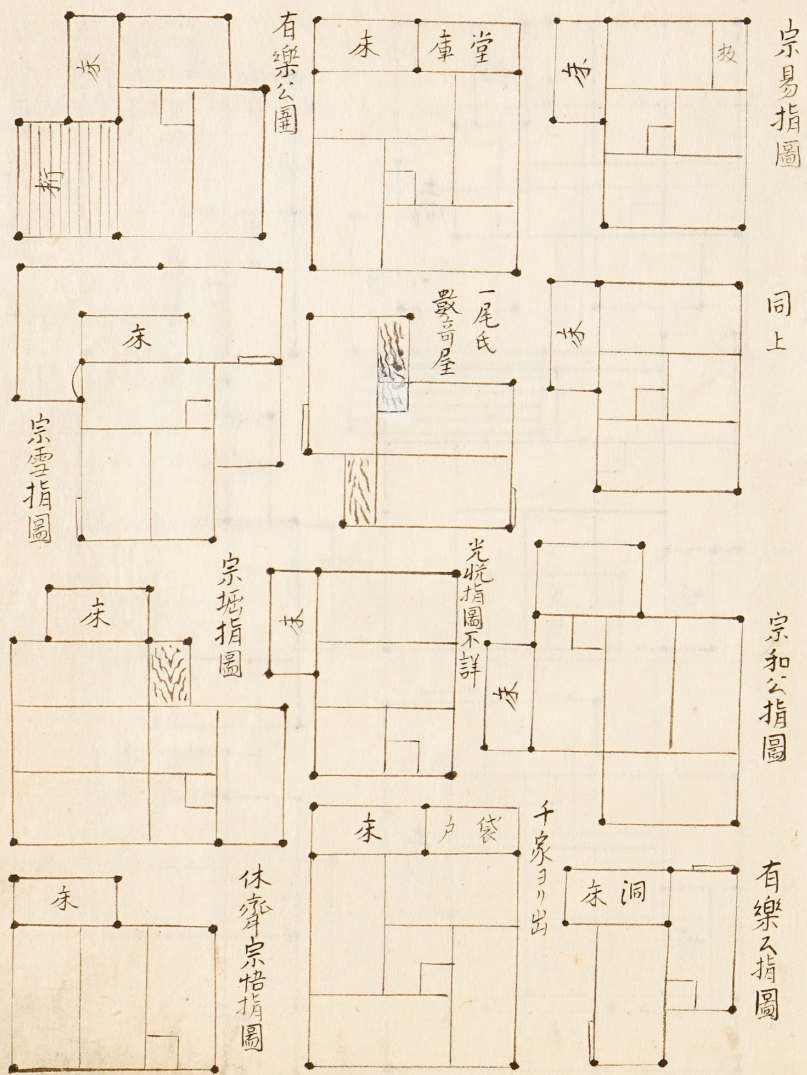
重勝公

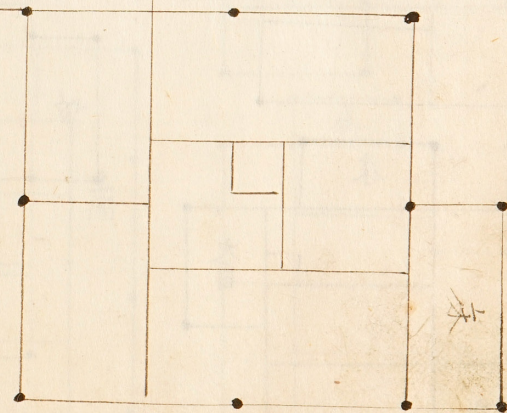
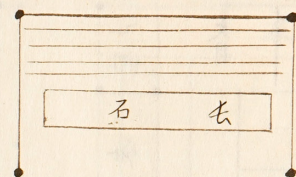
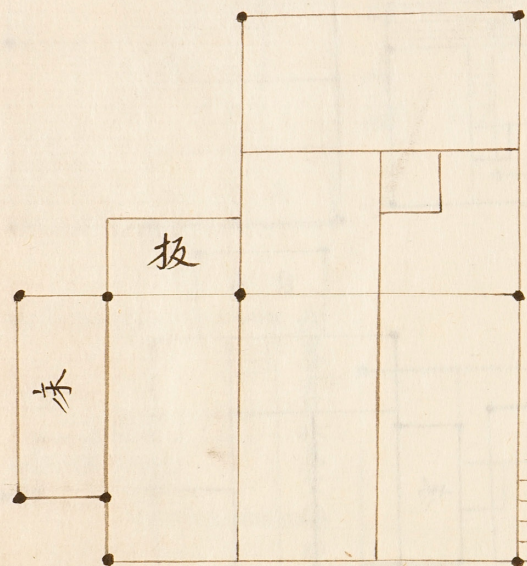


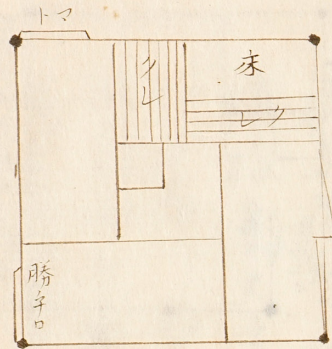


鹿菴之作三疊大目

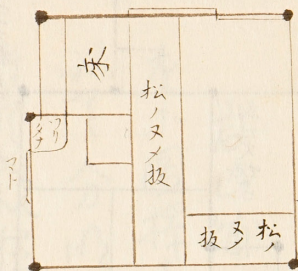




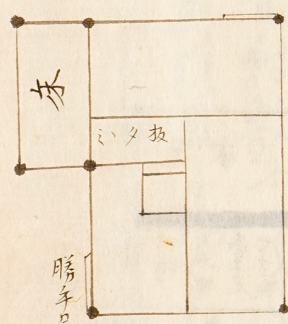




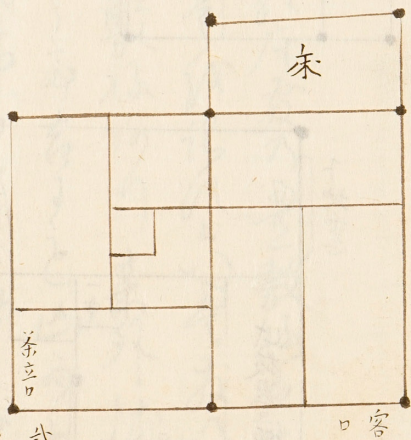
原由又好ノ座鋪



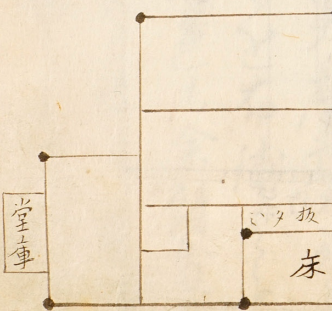
恭史宗安ノ指圖



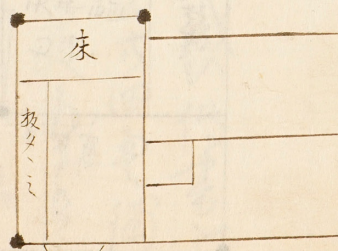
武骨天目板畳入板ノ間ノ出入



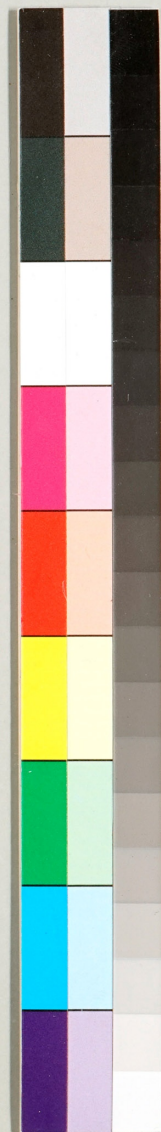
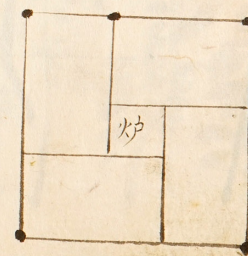
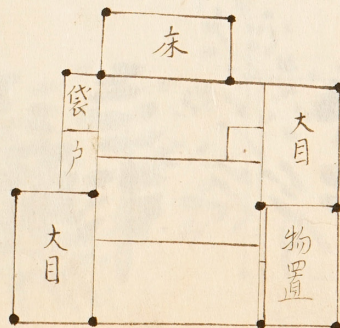
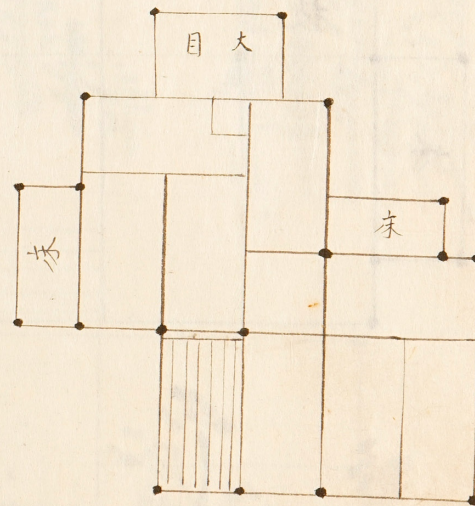
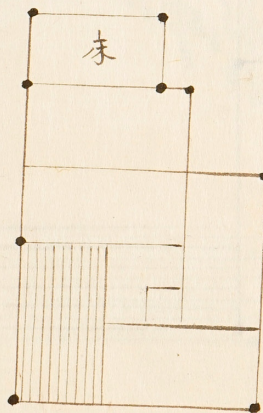
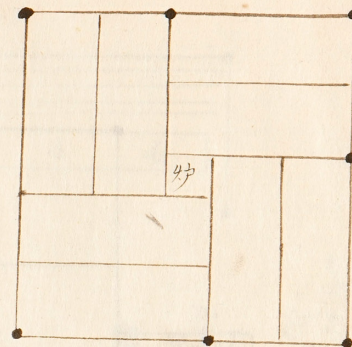
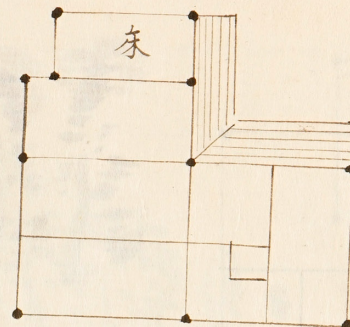
宗珠座鋪南都ニアリ



武骨半大目板畳入



武骨天目板畳入



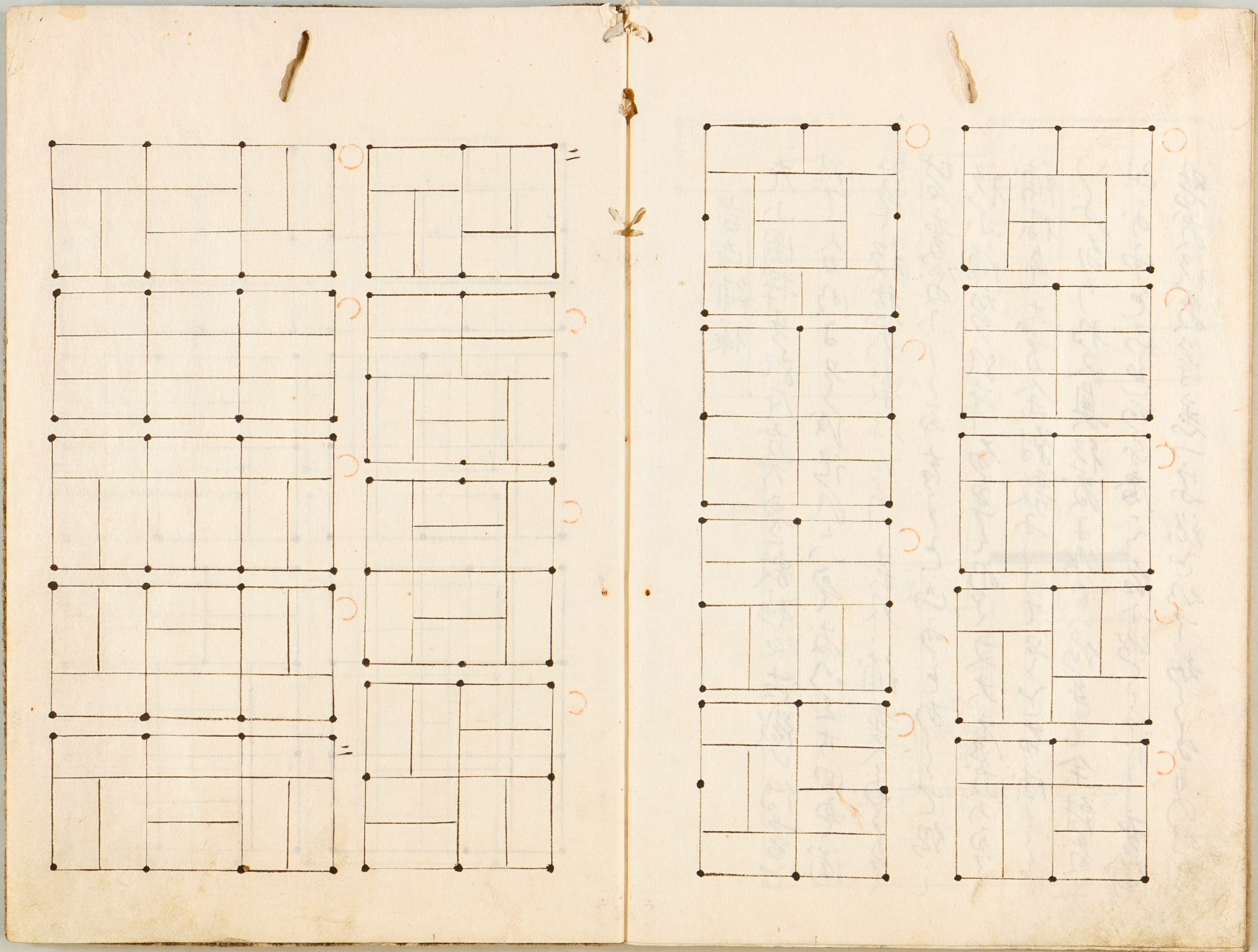
火
口

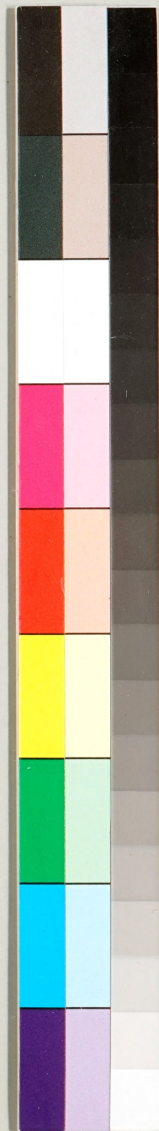
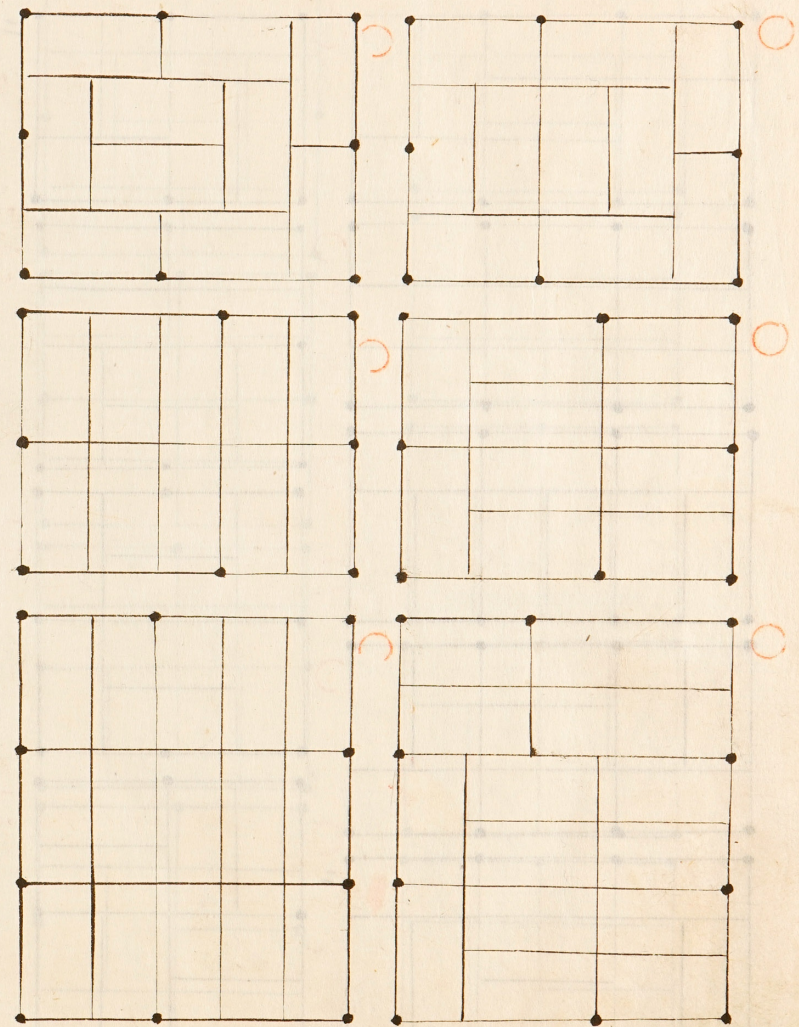
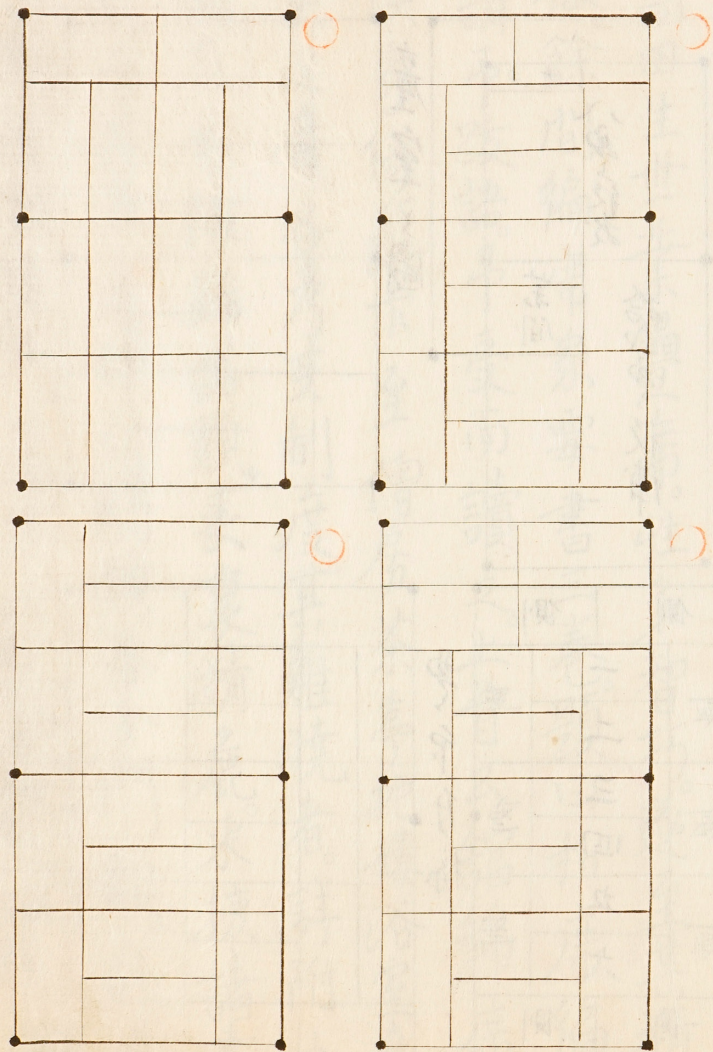
床

給仕火地口

床

九小圖擇其最度友乃最數極者古藏の傳書と
 以て分明に是れ記し六卷友の二四五補
 するに後愁乃數極なり其外補並あるを
 皆棄て去るに西吉と云ふとあるを併し
 後小補夢の席の多しなる又大度友の
 補極き大方余對數にして是と布補とと
 してあり又奥後友は次く八何と云ふ余對數に
 此の少と云ふは余の考へる者なり記す
 變補
 慈友後友等悉一字漏れり知る者の如し

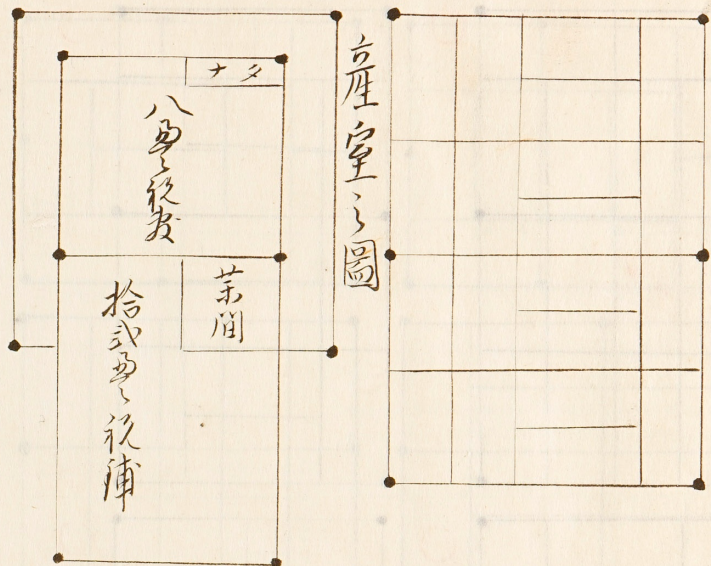




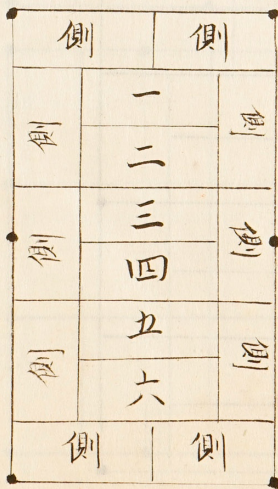
貞武拾遺後補

貞武拾遺後補

立座室之圖



坐中身標



和席編跋

高田生世業豐席。性多智巧。遂至其精微。餘間編席家要書三卷。題曰和席編。請予跋語。予受而讀之。上首公館錦席。侯家倚筵。下至僧房茶亭。抱樓浴室。產室之席。各考其制度。其難曉者。詳附之圖。及席緣飾品類。表裏精麁。采摭諸書。關吊其事者。伸引觸類。各分門類。詳悉明辨。可謂專門篤志之人也。其業之者。

苟得讀此書而存之於心庶幾無負上
古矩度乎疊之為字重疊之義而用之
於席則特此方之制已故加和字之吊
也醫生其是否不能審之而其用心之
勤深可嘉尚矣為書于其後云明和七
庚寅年七月穀旦片出承行并識



